

「小学校1年生問題」と教員配置・学級編制施策（第Ⅱ報）

—H県における「小学1年生はばたきプラン」の効果—

渡部 昭男*

An evaluation of the local educational policy placing part-time assistant teachers or full-time additional teachers in large-sized first-grade classes in elementary schools in “H” prefecture in Japan, in the academic year of 2001

WATABANE Akio

キーワード：小学校1年生問題，幼小接続，40人学級編制，補助教員，ティーム・ティーチング，少人数学級編制，事業評価

Keywords: educational problems of first-grade pupils and classes in elementary schools, articulation from pre-schools to elementary schools, “40-pupils-per-class” system, assistant teacher, team teaching, smaller-sized class system, local policy evaluation

はじめに

本稿は、「『小学校1年生問題』と教員配置・学級編制施策—T県における『小学校1年生支援事業』の効果—」¹⁾に続く第Ⅱ報である。

文部科学省がとりまとめた義務標準法第7次改善計画への都道府県教委の対応に関する調査²⁾によると、「小学校1年生問題」や学級崩壊現象として関心の高まっている小学校1年生または低学年を対象に少人数学級編制や副担任制を採ったり、非常勤講師を配置したところが少なからず存在した。ちなみに少人数学級編制にまで踏み込んだのは、各5月時点において改善計画の初（2001）年度において10府県、第2（2002）年度において22道府県であった。

しかし、教育委員会が独自の対応を行うに際して説明責任を果たし、実施後に事業評価を行い公開するところはまだ少ない。期せずして自治体の関心が集まることとなった小学校1年生または低学年における学級経営上の課題並びに就学前から義務教育への接続問題に関する課題の解明と、関連した教員配置・学級編制施策の在り方の究明が急がれよう。こうした関心から、第Ⅰ報ではT県の「小学校1年生支援事業」（2000年度）を取り上げてその効果を明らかにした。本稿（第Ⅱ報）では、H県の「小学1年生はばたきプラン」（2001年度）を取り扱う。

なおH県は、義務標準法第7次改善計画初年度に少人数学級編制に踏み込んだ県の一つである²⁾。「小学1年生はばたきプラン」とは、H県下（政令指定都市を含む）の公立小学校の第1学年に関して、1）平均在籍児35人超過学級が3学級以上の場合には「学級分割による少人数編制」、2）同じ

*人間教育講座（教授）Professor of Human Education Course [E-mail:akiowtnb@fed.tottori-u.ac.jp]

資料 1

小学1年生はばたきプラン

(小学1年生における少人数授業及び複数教員による指導)

1 事業目的

生活習慣・学習習慣を身に付けさせるための個に応じたきめ細かな指導を行うため、小学1年生について少人数授業及び複数教員による指導を行う。

2 事業内容

事業	少人数授業（35人以下）の実施	複数教員による指導
制	対象校 36人以上の学級が3以上の学校	対象校 36人以上の学級が2以下の学校
度	措置 常勤教諭1名を学校に加配	措置 1学級につき非常勤講師1名を学校に配置
業務形態	<p>〇〇小学校1年生</p> <p>児童 40人 児童 40人 児童 40人</p> <p>加配教諭</p> <p>児童 30人 児童 30人 児童 30人 児童 30人</p> <p>学級を分割した学習集団</p>	<p>□□小学校1年生</p> <p>児童 40人 児童 40人</p> <p>加配講師 加配講師</p> <p>児童 40人 児童 40人</p>
規模	<p>学校数 38校（見込）</p> <p>人員数 常勤38人</p>	<p>学校数 43校（見込）</p> <p>人員数 非常勤69人</p>

3 措置人数 107人（常勤38人 非常勤69人）（新規）

く2学級以下の場合には「補助教員を各学級に加配」という独自施策である(なお資料1では、「36人以上の学級」を対象と記述されているが「35人超過の学級」の誤りである)。いわゆる編制改善(3学級以上の場合)と配置改善(2学級以下の場合)の双方が導入されており、同一県で双方の施策の効果の相違を考察できる興味深い事業である。

I. 調査の対象・方法並びに回収状況

調査は、T県調査で使用したものを基本にした質問紙³⁾(巻末に掲載)を用いて、2002年2～3月に郵送にて行った。対象は、2001年度に同事業の適用を受けたことが判明した学校⁴⁾で、(1)「学級分割」タイプ(資料1の左欄「少人数学級(35人以下)の実施」)が37校(学校長37人及び1年生担任161人)、(2)「補助教員」タイプ(資料1の右欄「複数教員による指導」)が43校(学校長43人及び1年生担任68人[なお、補助教員自身には実施していない])である。

回収状況は以下の通りであった。

- (1)「学級分割」タイプ：①学校長37人中11人(30%)
 ②1年生担任が37校161人中21校(57%)51人(32%)
- (2)「補助教員」タイプ：①学校長43人中23人(53%)
 ②1年生担任が43校68人中23校(53%)32人(47%)

II. 2001年度における「小学1年生はばたきプラン」の現状と課題

1. 回答者の属性(設問A)(表1)

1) 校長

まず校長について見ると、性別では男性が約6割(「学級分割」タイプ64%、「補助教員」タイプ59%)を占め、年齢的には56～60歳(「学級分割」タイプ73%、「補助教員」タイプ57%)が多く、1年生の担任経験有りは約半数(「学級分割」タイプ45%、「補助教員」タイプ62%。なお、無記入2人はともに中学校・高校教諭免許状のみの保持者であった)に留まった。

2) 担任

次に担任について見ると、性別では女性が9割以上(「学級分割」タイプ92%、「補助教員」タイプ94%)を占め、年齢的には40歳代が5割台(「学級分割」タイプ55%、「補助教員」タイプ50%)であり、ほぼ全員が1年生の担任経験者であった(「学級分割」タイプ100%、「補助教員」タイプ97%)。

表1 回答者の属性(性別、年齢、1年生担任経験)

	性別 人(%)			年齢 人(%)					1年生担任経験 人(%)		
	女性	男性	無記入	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳代	有り	無し	無記入
「学級分割」タイプ 校長(1)-① N=11	4(36)	7(64)	-	/	-	-	3(27)	8(73)	5(45)	6(55)	-
「補助教員」タイプ 校長(2)-① N=23	9(41)	13(59)	1	/	1(4)	1(4)	8(35)	13(57)	13(62)	8(38)	2
「学級分割」タイプ 担任(1)-② N=51	47(92)	4(8)	-	1(2)	14(27)	28(55)	7(14)	1(2)	50(100)	-	1
「補助教員」タイプ 担任(2)-② N=32	29(94)	2(6)	1	1(3)	8(25)	16(50)	7(22)	-	31(97)	1(3)	-

2. 「1年生問題（小1プロブレム）」にかかわる「子ども」と「保護者」の特徴（設問C）

「1年生問題（小1プロブレム）」にかかわる最近の「子ども」と「保護者」の特徴を尋ねた設問Cは、尾木直樹氏（臨床教育研究所「虹」所長）及び大阪府同和教育研究協議会の「小1プロブレム」アンケート⁵⁾を援用して作成した。ただし、尾木氏らの調査が採っていた「とてもそう思う」「そう思う」「そうは思わない」「わからない」の区分は肯定選択肢に比重がかかっていると判断して、「そう思う」「どちらとも言えない」「そうは思わない」の3件法に改めた。

1) 子どもの特徴（図1）

設問Cに記入のあった1年生担任（79人）・校長（34人）について、「そう思う」の百分率を図1に示した。

まず1年生担任について見ると、50%以上は10項目中の7項目であり、第1位「c）他の子どもとうまくコミュニケーションがとれない」（78%）、第2位「f）習い事・お稽古事等が多くなっている」（77%）・「i）『ジコチュー児』（自己中心児）が増えた」（77%）、第4位「h）夜型の生活の子どもが増えた」（75%）、第5位「j）何かあるとすぐに『パニック』になる子が増えた」（67%）、第6位「b）片づけや挨拶など、基本的なことができない」（58%）、第7位「g）早期教育を受けている子どもが増えた」（56%）であった。「d）言動が粗暴になってきている」（47%）、「a）担任等（教職員）に甘えるようになってきた」（46%）、「e）親の前では『良い子』に変身する」（38%）の3項目は50%未満であった。

次に校長（管理職）について見ると、50%以上は10項目中の6項目であり、第1位「i）『ジコチュー児』（自己中心児）が増えた」（88%）、第2位「h）夜型の生活の子どもが増えた」（82%）、第3位「j）何かあるとすぐに『パニック』になる子が増えた」（79%）、第4位「b）片づけや挨拶など、基本的なことができない」（76%）、第5位「c）他の子どもとうまくコミュニケーションがとれない」（71%）、第6位「d）言動が粗暴になってきている」（53%）であった。「f）習い事・お稽古事等が多くなっている」（41%）、「g）早期教育を受けている子どもが増えた」（38%）、「a）担任等（教職員）に甘えるようになってきた」（35%）、「e）親の前では『良い子』に変身する」（32%）の4項目は50%未満であった。

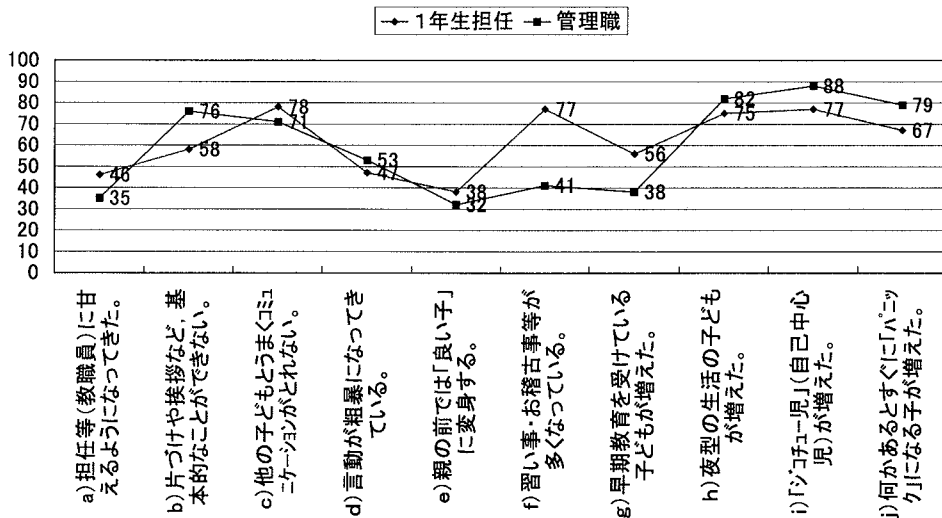
担任・校長を通じてともに50%以上を見ると、H県における「最近の1年生の特徴」としては、「i）『ジコチュー児』（自己中心児）が増えた」（担任77%・校長88%）、「h）夜型の生活の子どもが増えた」（担任75%・校長82%）、「c）他の子どもとうまくコミュニケーションがとれない」（担任78%・校長71%）、「j）何かあるとすぐに『パニック』になる子が増えた」（担任67%・校長79%）、「b）片づけや挨拶など、基本的なことができない」（担任58%・校長76%）の5項目が挙げられた。

自由記述では、図1に示された傾向・特徴が、以下のように生々しく語られている。

[自由記述・担任]

- ・食生活が乱れている。
- ・偏食の子どもが増えた。
- ・食事や排便の習慣に問題がある。考えないで行動する。
- ・睡眠や排泄、食事などの習慣ができていない児童もいる。朝食を食べてこず、集中できない児童が数名いる。
- ・過保護・放任が極端であるためか、子どもが淋しそう。

図1 「小学校1年生問題」：子どもの特徴



- ・ 落ち着きがない。人の話の途中ですぐしゃべり出す。何かを触っていないと話が聞けない。
- ・ 話を聴くことができない。無意識のうちに立ち歩く子がいる。
- ・ コミュニケーション能力が低下したように思う。忘れ物をして隣の子に「見せて」の一言さえ言わず(言えず?)隣の子が忘れていても「見せてあげる」の声かけさえも自然にはできない子が増えた。言葉をかける以前に、回りの子が目に入っていない様子もうかがえる。
- ・ 注意すべきことをした時、対話しながらよく考えさせているつもりで話し合っ、「(自分が)したことをどう思いますか。」と問うとほとんどの子が「イヤだ」という。自分が加害者であるのである。10年前は加害者側の子は、決して「イヤだ」とはいわずに、「いけなかった」「わかった」など自分の行為を振り返る言葉を必ず言っていた。相手の気持ちを想像する力に驚くほど欠ける。
- ・ テレビなどの影響で、大人のような物言いをする子がいてびっくりすることが多々ある。
- ・ 知識としては難しい言葉も知っているが、手先や身体を使った経験が少なく、自分でやろうとしない。または自分でできない。
- ・ 目の前の課題に根気強く取り組みず、「わからん」「やりたくない」と声や態度に出す子が増えた。自分の興味のあることには良く食いついてくるが、苦手なこと、興味のないことに(がまんしても)取り組もうという態度が少ない。
- ・ 自分の思いを出しにくい(決められない)子どもが増えた。ひもを結ぶ、プリント(おり紙)を折ることなどが、不器用になった。生活体験の不足?
- ・ 我慢できない。～した方がいいというのは分かっているができない、又は、あえてしようとなしない。前向きさ・ひたむきさがなくなってきた?めんどくさいことはしようとなしない。
- ・ 危ないと同じ注意をしても繰り返す。喧嘩をしているような話し方をする子が気になる。友達の良いところを素直に認めにくい子もいる—自分が大人から(家族から)ほめられていない(認められていない)。
- ・ 場に応じた判断ができにくい(人に頼りすぎる面がある)。

- ・集中力が短くなってきている。
- ・体を動かして遊ぶ時間が減った。特に帰宅してから。
- ・苦手なことや大変そうなことにぶつかると逃げようとして親をかつぎ出す（「～があるから学校に行きたくない」などと言う）。
- ・自分の思いばかりを通そうとする子どもと、自分の思いを言い出せない子がいる。
- ・失敗を恐れる子が多い。期待され過ぎで、本当の自分が受け入れられない感じ。学習障害（言葉が聞き取れない）が増えたようだ。
- ・喧嘩がほとんどない。喧嘩がないということは正義の味方が育たないということであり、良いこと悪いことを身をもって学ぶ機会が少ない。
- ・ジコチュウ・パニック児は年度によって異なる。全体的に見れば徐々に増えつつあるかも。
- ・幼児教育の中に自由教育が取り入れられたことで、集団の中での意識づけが薄らいでいると思う。
- ・前回の1年生と比べるとやや落ち着いていた。が、年々、教師に甘えたり、朝眠そうな子が目立ちたりします。
- ・学校（地域）の環境によって、子どもの質は異なると思う。

[自由記述・校長]

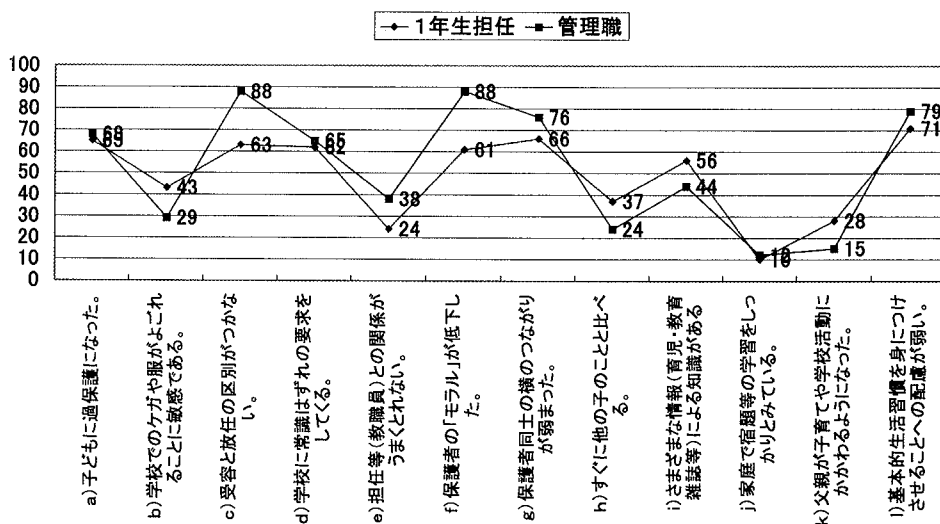
- ・食生活の乱れ。きちんと三食とっていない、食事に時間がかかる、好き嫌が多い、はしをきちんと使えない。
- ・大人も自分と同じ、先生も自分と同じと言う感覚が強い。
- ・大人とは対話できるが、子どもだけの集団の中に入れられない子どもが多くなっている。
- ・教師の指示に従うことができにくい。集団のルールを守りにくい。我慢ができない。
- ・がまんすることができない子どもが増えている。
- ・落ち着きがなく、ゆっくり（じっくり）と他人の話を聞き対応することができにくい児童は増してきたように感じます。自分の意志を自分で決定できにくく教師に頼ることも多いです（親にもその傾向あり）。
- ・全員を対象に注意をしても徹底しない。
- ・物事に感動しない子が増えた。本物と偽者の区別がつかない子が多い。
- ・子どもの本質が変わっているとは思わないが、育てられかたの変化の中でこのように見える子は確実にある（集中力・粘り強さの欠如）。

2) 保護者の特徴（図2）

保護者の特徴についても、同様に図2に示した。

まず1年生担任について見ると、50%以上は12項目中の7項目であり、第1位「l」基本的な生活習慣を身につけさせることへの配慮が弱い」（79%）、第2位「g」保護者同士の横のつながりが弱まった」（66%）、第3位「a」子どもに過保護になった」（65%）、第4位「c」受容と放任の区別がつかない」（63%）、第5位「d」学校に常識はずれの要求をしてくる」（62%）、第6位「f」保護者の『モラル』が低下した」（61%）、第7位「i」さまざまな情報（育児・教育雑誌等）による知識がある」（56%）であった。「b」学校でのケガや服がよごれたことに敏感である」（43%）、「h」すぐに他の子のことと比べる」（37%）、「k」父親が子育てや学校活動にかかわるようになった」（38%）、「e」担任等（教職員）との関係がうまくとれない」（24%）、「j」家庭で宿題等の学習をしっかりとみている」（10%）の5項目は50%未満であった。

図2 「小学校1年生問題」：保護者の特徴



次に校長について見ると、50%以上は12項目中の6項目であり、第1位「c) 受容と放任の区別がつかない」(88%)・「f) 保護者の『モラル』が低下した」(88%)、第3位「l) 基本的な生活習慣を身につけさせることへの配慮が弱い」(79%)、第4位「g) 保護者同士の横のつながりが弱まった」(76%)、第5位「a) 子どもに過保護になった」(68%)、第6位「d) 学校に常識はずれの要求をしてくる」(65%)であった。「i) さまざまな情報(育児・教育雑誌等)による知識がある」(44%)、「e) 担任等(教職員)との関係がうまくとれない」(38%)、「b) 学校でのケガや服がよごれたことに敏感である」(29%)、「h) すぐに他の子のことと比べる」(24%)、「k) 父親が子育てや学校活動にかかわるようになった」(15%)、「j) 家庭で宿題等の学習をしっかりとみている」(12%)の6項目は50%未満であった。

担任・校長を通じてともに50%以上を見ると、H県における「最近の保護者の特徴」としては、「l) 基本的な生活習慣を身につけさせることへの配慮が弱い」(担任79%・校長79%)、「g) 保護者同士の横のつながりが弱まった」(担任66%・校長76%)、「a) 子どもに過保護になった」(担任65%・校長68%)、「c) 受容と放任の区別がつかない」(担任63%・校長88%)、「f) 保護者の『モラル』が低下した」(担任61%・校長88%)、「d) 学校に常識はずれの要求をしてくる」(担任62%・校長65%)の6項目が挙げられた。

自由記述では、図2に示された傾向・特徴が、以下のように生々しく語られている。

[自由記述・担任]

- ・色々な子ども・保護者・家族があつて当然であるが、しっかりしている家庭とそうでない家庭とがはっきりとわかれ、差が大きいように思う。
- ・個人差がある。関心があつても手が回らない人もあるし、口だけの人もいる。子育てに迷っているのであろう。
- ・保護者によつても意識の差が大きい。それが子どもに影響して、個人差が大きい。
- ・お便りノートに毎日あつたことを連絡する親、まるでお便りノートを見ていない親など極端である。

- ・子ども並みの人が増えた。ジコチュウ、礼儀しらず。
- ・親が子と同じレベル。「親としてどうするか」というスタンスがない。親も自分の欲求を優先させ、子どもに相応しい生活を配慮していない。平日の夜遅くまでカラオケに行く。赤信号で子どもが止まっても何で止まるのかと子を叱る親。子どもが誠実な生き方をしているも「融通のきかない子」として認めようとせず、小さいころから大人並の判断（気の利いた臨機応変）を求める傾向が強い。子は小さなステップをのぼっていくなかで成長するが、何でもかんでもストレス・ストレスといて否定してしまう。ストレス恐怖症にかかっているようである。
- ・叱る（指導する）ラインがよく分からない。
- ・一般的な常識に欠ける保護者もいる。
- ・学校、教師への過剰なまでの要求はするが、我が子の基本的な生活習慣がついていない。その責任を教師に求める。
- ・昔の保護者は学級集団に目を向け、懇談会などに意見が出ていたが、今は自分の子にしか目が向けられず、話し合いで最終的な方向が出ることが少ない。
- ・全体の懇談会では発言しないで、終わったあとに一对一で話をする保護者が増えた。子どもからの話で判断してしまい、批判的な言い方をされると怒ってしまうなど、客観的に判断しようとしていない保護者が増えた。
- ・懇談会への参加が減ってきた。
- ・子どもが悲しい思いをしたとき、友達のせい、担任のせいにしがち。子どもを守る方をすぐとり、その壁を乗り越えさせるより、壁を取り払っている。本当の解決になっていない。
- ・学校で嫌なことがあった時、子ども自身で言わず、代わりに保護者が言うことが増えた。子どもの話だけを全面的に信じて、学校や他の子どもを批判する方がふえた。
- ・子ども同士の喧嘩がもとで、親同士がトラブルになることが多い。保護者同士の人間関係が希薄。
- ・自分の子はまだ赤ちゃんだから、学校のしつけは厳しすぎると、学習規律をしつけようとすると言った。
- ・子どもの「～があるから」を受けて、「無理をさせないで」「とにかく楽しいのが良い」などと、子どもが困難を乗り越えて成長する場面をつぶしてしまう。
- ・叱ったり指導したりすると、「なんで家の子だけ」という意識が根底にあるように思う。個人主義（自分の家が幸せであれば、又は自分たちが楽しければ）が強く、してもらって当たり前という感じが強い。その反面、落ち度は強く指摘してくる。
- ・児童のことを注意すると、保護者は自分が反省するのではなく、児童を怒る（場合によってはたたく）人が多くなってきているかなと思う。
- ・子どもを注意したのに、自分が責められたと感じる親が多いので、いいことしか保護者に伝えられない。協力して子育てができない。19年前は親と普通に会話ができた。
- ・子どもに手をかけ過ぎで心はかけていない。持ち物に名前の記入がなく、非常に困った。納金について前もって連絡していても揃わない。1週間くらいかかる。
- ・食事に対して気遣わず、野菜をぜんぜん食べられない子どもが年々増えている。
- ・地域社会の中での人とのつながりの弱さを示している。教育情報がマスコミから入れられすぎている。

[自由記述・校長]

- ・保護者の価値観が多様化している。

- ・きちんとしている親もいれば、できない親もいる。両親共働きで母親が忙しい家庭が増えているのではないか。でも、子どものこととなると真剣に取り組まれる親も沢山おられる。
- ・家庭のしつけを学校任せにする保護者が増えている。大半の保護者は学校教育に対し協力的であるが、批判的な保護者や非協力的な保護者、無関心な保護者が少しずつ増えてきている。
- ・学校とともに担任と一緒に子どもを育てるという意識がうすく、自分の不満を一方的に訴える傾向がある。
- ・学校教育に頼りすぎる。自立していない。
- ・若い保護者は子どもより子どものためであり、社会生活(生涯学習)を通して指導(学習)の機会が与えられるべきである。
- ・大人になりきれていない親が多い。
- ・子ども同士の喧嘩に親が大変過敏である。
- ・個人の自由ということもあるが、集団生活の中で一定のルールを定めると我が子・我が家は〇〇であるのだが等の質問が多く、学校として実践したいとの意向を納得させるのに(協力)難しいこともある。
- ・子どもの行動を個性の尊重で片付ける親。私の方針ですとって耳をかさない親。
- ・子どもを社会的に自立させる存在として見ていない。ペット化している。
- ・教育評論家が多い。

3. 小学校と就学前機関(幼保)との連携(設問C)

最近の子どもや保護者の変化・特徴を踏まえて、H県の小学校では就学前機関(幼稚園・保育所)とどのような連携を行っているのでしょうか。この項目は、校長用の調査用紙にのみ設けたものである。

結果は、「学級分割」タイプ(3学級以上規模校)の学校では「行っている」9人(82%)・「行っていない」2人(18%)であり、「補助教員」タイプ(2学級以下規模校)の学校でも「行っている」19人(83%)・「行っていない」3人(13%)・「無記入」1人(4%)とほぼ同様であり、学校規模の相違にかかわらず回答のあった8割強の小学校が何らかの連携を行っていた。

具体的な取り組みを自由記述から拾ってみると、「連絡会」や話し合い・情報交換の場の設定が最も多く、小学校から幼稚園・保育所への参観、幼稚園・保育所から小学校への参観といった教職員による相互参観、就学予定児の体験入学、運動会などの行事への参加、登校(園)班・合同給食や交流タイムでのふれあいといった子ども達の交流が行われていた。加えて、生活科や総合的な学習の時間での学習体験の保障なども試みられていた。これらは、学級編制や児童指導・保護者対応への参考にされていた。

[自由記述・校長]

- ・子ども一人一人の実情を話し合い、小学校学級編制に生かしている。
- ・子どもにかかわる情報(行動の特徴、人とのかわり、親の考え方など)を得るため、近隣の幼保を手分けして訪問している。学級分けの参考にしてはいるが、指導にかかわる連携までには至っていない。
- ・年度末に、保幼小の連絡会を行い、新一年生についての情報を得る。5月の参観日に幼保に連絡し、特に一年生の様子を参観してもらう。一学期末に授業参観後、一年担任と幼保の連絡会を開

- き、子ども達の様子について話し合う。3月に幼保の保育参観に出かける。
- ・幼保児が1年生の授業を参観に来る。生活科などで作品を作るとき等に呼んであげる。
 - ・登園・登校班を組んで一緒にしている。行事や交流タイムを設けて共に学んでいる。
 - ・総合的な学習の一環で幼稚園児とのふれあいがある。幼稚園からも小学校訪問をされ、5年生と学校巡りや遊びを共にしている。
 - ・総合的な学習の中で交流。
 - ・行事への参加。小学校でのランチルーム給食。小学生との合同給食・授業。
 - ・小学校から幼保に向いて、子どもの様子をみたり、話を聞く会を作っている。幼保児の小学校訪問日を作っている。お互いの行事に参加している。
 - ・1年生と保育園年長児との交流。
 - ・交流会。
 - ・1年生と年長組との交流会。発表会への職員招待。保幼小の連絡会。
 - ・保育所（年長組）の小学校見学。保育所と小学校との連絡会（子どもについて）。
 - ・体験入学、保幼小の連絡会。
 - ・保幼小連絡会を実施。体験入学や生活科の授業に招待。
 - ・連絡会を設定し、園での様子、入学してくる子の指導等の話し合いをしている。
 - ・連絡会を持ち、要配慮児童について話し合っている。
 - ・連絡会を行っている。
 - ・幼保と年に1回連絡会を行っている。
 - ・就学近くなると話を聞きに出かける。運動会やおゆうぎ会の参観に出かける。
 - ・年に1～2回、保幼小の連絡会。入学前に保幼からの授業参観を設けている。
 - ・入学前に幼保に行き、子どもの様子等を把握するようにしている。
 - ・入学前に幼保を訪問し、入学児童の状況について連携を持っている。
 - ・保幼小の連絡会。近隣の保幼の保育参観。
 - ・2学期・運動会。3学期・保幼の保育参観、その後個々の子どもについて意見交換。入学説明会（保護者対策）を徹底させている。
 - ・幼保と次年度入学予定児について年度初めから情報交換している。
 - ・就学予定児童について、保育所と小学校で連絡会を持ち、受入準備をしている。
 - ・入学前の連携、入学後の連携は必ず。あとは必要に応じて。

4. 「小学1年生はばたきプラン」への評価と事業の実際

1) 事業への評価（設問E）（表2）

導入1年目のH県の「小学1年生はばたきプラン」は、実施現場においてどのように評価されているのであろうか。「非常に成果があった」「ある程度あった」「どちらともいえない」「あまり成果はなかった」「ほとんどなかった」の5件法で尋ねたところ、結果は表2のようであった。

「学級分割」タイプでは、校長が「非常に成果があった」9人（82%）・「ある程度あった」2人（18%）、担任が「非常に成果があった」34人（68%）・「ある程度あった」16人（32%）〔無記入〕1人は外数〕であり、小計で7割が「非常に成果があった」と回答していた。「補助教員」タイプでは、校長が「非常に成果があった」15人（65%）・「ある程度あった」7人（30%）・「どちらとも言えない」1人（4%）、担任が「非常に成果があった」17人（57%）・「ある程度あった」12人（40%）・

表2 「小学校1年生はばたきプラン」による成果への評価

	非常に成果 があった	ある程度 あった	どちらとも いえない	あまり成果 はなかった	ほとんど なかった	無記入
「学級分割」タイプ・校長(1)-① N=11	9(82)	2(18)	—	—	—	—
「学級分割」タイプ・担任(1)-② N=51	34(68)	16(32)	—	—	—	1
「学級分割」タイプ小計 N=62	43(70)	18(30)	—	—	—	1
「補助教員」タイプ・校長(2)-① N=23	15(65)	7(30)	1(4)	—	—	—
「補助教員」タイプ・担任(2)-② N=32	17(57)	12(40)	1(3)	—	—	2
「補助教員」タイプ小計 N=55	32(60)	19(36)	2(4)	—	—	2
総計 N=117	75(66)	37(32)	2(2)	—	—	3

「どちらとも言えない」1人(3%)〔「無記入」2人〕であり、小計で6割が「非常に成果があった」と回答していた。なお表2では、「補助教員」タイプにおいて「どちらともいえない」が選択されるなど、「補助教員」タイプは「学級分割」タイプほどその成果への評価が高くない印象を与えている。しかし、統計的な有意差は認められなかった。

以下では、各校別に例示することによって、「小学1年生はばたきプラン」の実施実態や、「学級分割」タイプ・「補助教員」タイプの間での量的・統計的にはうかがえない相違を検討したい。

2) 事業の実態：「学級分割」タイプ(例示9校/調査対象37校)(設問A・B・D・E)

回答のあった学校の内、校長と担任の双方から回答のあった9校に関して、学校(学校Naで表示)ごとに事業の実態を以下に例示する。

まずは、「学級分割」タイプである。「学級分割」タイプは資料1にもあるように、小学1年生における「35人超過の学級」が3学級以上の学校に常勤教諭1人を加配することによって「35人以下の学級」を実現するタイプである。1年生の増加学級の担任は、加配教諭が務めることもあれば、学校の裁量によって従来の専科教諭が務めて加配教諭は専科等に回わることもある。どの程度の少人数学級になるかは学級数及び在籍児童数によって異なっており、「3学級(106～120人)+1学級」の場合は「26.5～30.0人」に、「4学級(141～160人)+1学級」の場合は「28.2～32.0人」に、「5学級(176～200人)+1学級」場合は「29.3～33.3人」になる(ちなみに、2001年度におけるH県の小学1年生の最大在籍児童数は181人であった)。

○2003校：全校児童900人台・28学級、1年生一加配後5学級・1学級平均31.6人(国の標準：4学級・39.5人)

[校長]

属性：男性、56～60歳、教職経験年数36年目(現任校3年目)、1年生の担任経験なし。

「1)非常に成果があった」。

- ・以前に比べ、学級に落ち着きが見られ、きめ細かな指導がなされるようになった。
- ・不登校ぎみな児童への対応が学年でよく協力して行われ、問題解決が早くなった。
- ・学級が落ち着くと、保護者も安心。

「1年生学級の適正規模：5)26～30人」「望ましい施策：1)少人数学級編制(理由：低学年で時と場に応じて人数を変えることは疑問に思う)」「はばたきプランの改善充実：2)2年生に広げる」
 ・改善課題：小1で予想される問題については学校全体で取り組む必要がある。／保護者へのカウンセリングができる人を学校にも置く必要がある。／1年生・2年生合同で参加できる授業を考える必要がある。

[担 任]

属性：女性，30歳代，教職経験年数16年目（現任教1年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

- ・担任がひとりひとりの児童とかかわる時間の余裕ができた。
- ・学年の担任が多いほど運営しやすい。

「1年生学級の適正規模：5）26～30人」「望ましい施策：1）少人数学級編制」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：大規模校に限定せず（学級分割を）実施してほしい。

[傾 向]

校長・担任ともに「非常に成果があった」と評価しているが，1年生学級の適正規模としては加配後の31.6人よりもさらに少人数の「26～30人」を望んでいる。また，校長は低学年では集団を多様に変化させるのではなく，安定した少人数集団の方が望ましいと見ていた。

○2005校：全校児童600人台・23学級，1年生一加配後4学級・1学級平均28.3人（国の標準：3学級・37.7人）

[校 長]

属性：男性，56～60歳，教職経験年数37年目（現任教2年目），1年生の担任経験あり。

「2）ある程度あった」

- ・比較できないことであるから分からないが，1年間大きなトラブルがなかったことで成果があったと受けとめている。
- ・3学級から4学級になったが，各学級に特別に配慮を要する子どもがあり（学習面だけでなく排泄などの基本的な生活習慣も。それと，最近，就学前のしつけなど家庭で行き届かないことが多い），標準のままの人数ではかなりの混乱と指導の不十分さがあったのではないかと予測できる。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人または5）26～30人（人数が少ないほど目はよく行き届くが，さまざまな個性にふれたり，まとまった学級活動をしったりするためにはある程度の人数が必要）」
「望ましい施策：1）少人数学級編制」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする」

- ・改善課題：低学年の学級定数改善。／親を支援する（育てる）体制づくり。／幼保と小の連携。／教員の資質向上—研修の充実。／学校の様子を知らせる（説明責任の立場で）こと。保護者との連携。「教育（改革）はともどもに」の共通意識を広めながら。

[担 任①]

属性：女性，40歳代，教職経験年数21年目（現任教3年目），1年生の担任経験あり。

「2）ある程度あった」

- ・少ない人数（29人）であったため，4月には「ジコチュー」そのままではじめのつかない人達が，比較的早く手の内に入って集中できるようになったと思う。4月いっぱいでは何とか学習に気持ちが向くようにできたのも人数のせいだと思う。これ以上多いと，担任の健康破壊が先かという問題になる。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人」「望ましい施策：1）少人数学級編制」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

【担 任②】

属性：女性，50歳代，教職経験年数33年目（現任校1年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

- ・学習面：個々の力を合わせて個別指導ができやすかった。
- ・生活指導：必要とする児童数が少し減って指導に時間をかけられた。
- ・担任：ノートなど見るのにも時間がかからない分，色々な指導ができやすかった。
- ・保護者：連絡などに丁寧に返事を返すことができた。
- ・子ども：待ち時間が少ない。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人」「望ましい施策：3）学級分割とT Tの組み合わせ」「はばたきプランの改善充実：3）近いうちに6年生まで少人数学級編制にする。」

- ・改善課題：人数が少なすぎるのも問題です。そういう場合（分割して人数が少なくなる時）は，二人担任などで色々な形ですすめられればいいです。

【担 任③】

属性：女性，60歳代，教職経験年数25年目（現任校1年目），1年生の担任経験あり。

「1）ある程度あった」

- ・遅進児への指導ができてそれなりに効果が上がったと思う。
- ・ノートの点検なども時間内にできて，漢字や計算の基礎学力をつけることができた。
- ・子どものがんばりや良さを見つけてほめたり，励ましたりして，楽しい気分にして学ぶ意欲を引き出した。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人」「望ましい施策：？」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：学習時間だけは子どもと進めることができた。しかし，休憩時間には子どもと遊ぶゆとりがなかった。遊びの中からお互いに学ぶことも多いと思う。

【傾 向】

校長・3担任ともに「非常に成果があった」「ある程度あった」と評価しているが，1年生学級の適正規模としては加配後の28.3人よりもさらに少人数の「21～25人」を望んでいる。

○2010校：全校児童600人台・21学級，1年生一加配後4学級・1学級平均28.0人（国の標準：3学級・37.3人）

【校 長】

属性：女性，51～55歳，教職経験年数33年目（現任校3年目），1年生の担任経験あり。

「2）ある程度あった」。

- ・一人一人によりきめ細かく接することができ，入学時の不安を受けとめることができる。
- ・入学前と入学後の集団が大きく違わなくてスムーズに小学校生活が送れる。

「1年生学級の適正規模：5）26～30人」「望ましい施策：1）少人数学級編制」「はばたきプランの改善充実：3）その他：1・2年生は30人学級，他学年は35人学級が望ましい。」

- ・改善課題：まず1・2年にこのプランが定着することを望む。

【担 任①】

属性：女性，30歳代，教職経験年数15年目（現任校8年目），1年生の担任経験あり。

「2）ある程度あった」

- ・学習では個別指導がしやすい。
- ・生活指導でも一人一人に目を向けやすい。

「1年生学級の適正規模：5）26～30人」「望ましい施策：1）少人数学級編制」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：今後、3・4年生となっても続けてほしい。

【担任②】

属性：女性，40歳代，教職経験年数25年目（現任校1年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

- ・一人一人の状況を把握できて，きめ細かく対応できた。
- ・つまずきをいち早く見つけて個別指導をし，早めに対応できた。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人」「望ましい施策：1）少人数学級編制（30人学級で担任＋1名のTT教員がいることが望ましい）」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする＋2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：3年生以降も続けてほしい。3年生になった時，子どもが落ち着きがなくなる恐れがある。

【傾向】

校長・2担任ともに「非常に成果があった」「ある程度あった」と評価している。1年生学級の適正規模としては，校長と担任①は加配後の28.0人と同程度の「26～30人」を，担任②はさらに少人数の「21～25人」を望んでいる。なお，担任は他学年にも少人数学級編制を拡充すべきと考えているが，校長は低学年は30人学級，他学年は35人学級が望ましいと見ていた。また，1担任は，30人学級編制にした上でさらにもう1人の加配教員がほしいと望んでいた。

○2017校：全校児童600人台・22学級，1年生一加配後4学級・1学級平均28.0人（国の標準：3学級・37.7人）

【校長】

属性：男性，56～60歳，教職経験年数33年目（現任校4年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」。

- ・担任がきめ細かな指導ができるようになった。
- ・ノートなど丁寧に見れ，適切なアドバイスを与えることができるようになった。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人」「望ましい施策：1）少人数学級編制」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：低学年への導入をまずきっちり決めること。／課題をしっかり把握し，次のステップにすること。

【担任①】

属性：女性，30歳代，教職経験年数9年目（現任校3年目），1年生の担任経験あり（幼稚園・保育士資格あり）。

「1）非常に成果があった」

- ・何に成果があったかは具体的に思い当たらないが，少人数なので子どもに対する余裕がこちらに出たことが一番良かったと思う。それで，指導や経営へも成果が出ていると思う。

「1年生学級の適正規模：5）26～30人（1年生は担任と自分の世界が多い。向き合うには30人が

限度だと思う)」「望ましい施策：1) 少人数学級編制 (1年生は担任制がよいと思う)」「はばたきプランの改善充実：2) 2年生に広げる。」

・改善課題：全学年にして行くべきだと思う。高学年も少人数で一人一人をみていかないと難しいという声を聴いたりもしました。

[担任②]

属性：女性，40歳代，教職経験年数20年目（現任校7年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

・一人一人にかかわることのできる時間が増え，子ども達の精神が大変安定していたと思う。
・保護者にとっても同じことが言える。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（今年28名で大変よかったが，もう少し少ないともっと良いと感じたから)」「望ましい施策：1) 少人数学級編制」「はばたきプランの改善充実：2) 2年生に広げる。」

・改善課題：多くの人間がTTなどとして子ども達にかかわることは良いことだと思うが，1年生の一学期の段階では難しいと思うので，1クラスを少人数にするのが良いと思う。2年生ぐらいでは少人数指導も良いと思うが，どの教科をどのように分割するかなど，組織上難しいことも出てきそう。

[担任③]

属性：女性，40歳代，教職経験年数22年目（現任校6年目），1年生の担任経験あり。

「2）ある程度あった」

・ノートやプリント類を担任が見るとき，子ども達を待たせることが少ない。
・子どもの要望に早く担任が応じて行ける。
・個別指導に時間をとることができる。
・保護者も配慮が行き届く安心感があったようだ。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（教師にとって少ないほど配慮が行き届くが，子ども同士の集団としての高まりに必要な人数を考えるため)」「望ましい施策：?」「はばたきプランの改善充実：2) 2年生に広げる。」

・改善課題：今後も継続されることが望まれる。／少人数教育の大切さを一般社会にもっと伝えて行くべき。

[傾向]

校長・3担任ともに「非常に成果があった」「ある程度あった」と評価している。2010校と同様に加配後28.0人であるが，1年生学級の適正規模としては，1担任が「26～30人」であるのを除いて，3人はさらに少人数の「21～25人」を望んでいた。また，2担任が1年生では少人数指導ではなく，安定した少人数集団（担任制）の方がよいと見ていた。

○2020校：全校児童600人台・21学級，1年生一加配後4学級・1学級平均27.0人（国の標準：3学級・36.0人）

[校長]

属性：女性，56～60歳，教職経験年数37年目（現任校4年目），1年生の担任経験なし（2年生以降はあり）。

「1）非常に成果があった」。

- ・第一のメリットは担任の目が児童一人一人に行き届くことです。本校においては従来なら3学級ですので1クラス36～37人ということになり、約10名の人数が1クラスあたり減となりました。生活指導・学習指導と細部にわたり声かけをしてという状況ができました。保護者からも児童が落ち着いて「いいですね」の声も多くありました。2年生ではどうなのだろうとの不安を聞いておりましたが、平成14年度は2年生まで拡大されますので大歓迎しております。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人」「望ましい施策：1）少人数学級編制（少人数指導）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：ぜいたくを言うようですが、少人数ともう一名副担のような人材がいれば益々指導の効果は上がって行くと思います。14年度についてはハローワークとの関わりで6月より1日6時間のフレッシュマン再雇用ということで非常勤の学校の目的に合う人材を得ることができますので、利用して行こうと考えています。

〔担任〕

属性：女性，40歳代，教職経験年数16年目（現任校9年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

- ・27名でスタートし、子ども達一人一人を大切にすることができたと思う。子ども達全員に目が届くゆとりが私自身に増えたと思う。以前は学級事務やノート・テスト・宿題の丸付けに終われる日々であったが、少しゆとりがあった。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（教師の目が届く範囲である）」「望ましい施策：1）少人数学級編制」「はばたきプランの改善充実：3）その他：全学年に広げる。」

- ・改善課題：2年生でも引き続きはばたきプランが行われることになったが、3年生から人数が増えることになると様々な問題も起こってくると思う。どのクラスも35人編制でいくようになってほしい。

〔傾向〕

校長・担任ともに「非常に成果があった」と評価しているが、1年生学級の適正規模としては加配後の27.0人よりさらに少人数の「21～25人」を望んでいた。また校長は、少人数学級編制に加えてさらにもう1人の加配教員があれば望ましいと述べている。

○2021校：全校児童700人台・21学級，1年生一加配後4学級・1学級平均29.8人（国の標準：3学級・39.7人）

〔校長〕

属性：男性，56～60歳，教職経験年数34年目（現任校1年目），1年生の担任経験なし（2年生以降はあり）。

「1）非常に成果があった」。

- ・きめ細かく指導ができたのは明らかで保護者にも好評。
- ・また、日々の勤務状態を見て担任の負担も軽減したと思う。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（少なすぎると活気に欠ける。20～22・23人くらいが良い）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（25人未満）」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする。」

- ・改善課題：14年度は2年生にも適用されることが決まったが、指導効果を上げるためにも教員の若年化を図るためにも全学年少人数学級編制にするのが望ましい。

[担任①]

属性：女性，30歳代，教職経験年数12年目（現任教10年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

- ・一人一人をきちんと見てあげる時間がとても多くなり，子どもの思いを拾い上げることが十分できたと思う。
- ・学習面でも個別に指導する時間もとることができた。その結果，子ども達も落ち着いて学校生活を送れたように思う。

「1年生学級の適正規模：5）26～30人（一人一人に机間巡視ができる）」「望ましい施策：1）少人数学級編制」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：将来的には少人数学級（20人）にしてもいいのではないかと思う。

[担任②]

属性：女性，30歳代，教職経験年数13年目（現任教1年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

- ・一人一人の子どもに接する時間が多くとれた。

「1年生学級の適正規模：4）26～30人（経験上）」「望ましい施策：1）少人数学級編制」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする＋2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：他の学年（1年以外）でも実施してほしい。

[傾向]

校長・2担任ともに「非常に成果があった」と評価している。1年生学級の適正規模としては，校長は「21～25人」，2担任は「26～30人」を望んでいた。

○2025校：全校児童600人台・21学級，1年生一加配後4学級・1学級平均30.0人（国の標準：3学級・40.0人）

[校長]

属性：男性，51～55歳，教職経験年数33年目（現任教4年目），1年生の担任経験なし（3年生以降はあり）。

「1）非常に成果があった」

- ・まず算数科において適切な指導ができ，差が少なくなってきた。
- ・学習につまずきのある児童が，教師とのふれあいが多くなり，質問も安心してしてくる。
- ・保護者は少人数やT Tの授業の様子から，子どものやる気が出てきていることを担任に話されている。

「1年生学級の適正規模：5）26～30人（低学年には色々な支援が必要である）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（クラスを固定して人間関係を学ぶ）」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする＋2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：少人数学級編制にし，かつ，別の加配教員がT Tとして支援に当たるなど，きめ細かい指導を徹底したい。

[担任①]

属性：女性，30歳代，教職経験年数16年目（現任教2年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

- ・学習につまずきのある子どもに個別指導する時間が多くとれた。基礎学力の充実に効果あり。

・1年生の子どもはどの子ども自分を見てほしいと言う願いをもっているように思う。40人学級よりは一人一人に声をかける回数が増えたと思う。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（1対1で直接指導することが多いので、個に関わる時間があるため）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（25人。1年は自分の組を覚えるだけで精一杯。小さい集団で学校でのルールや学習の基礎を学んだ方が良い）」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする。」

【担任②】

属性：女性，40歳代，教職経験年数23年目（現任教2年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

・個別指導が必要な子に関わる時間がはるかに多くなっていると思う。またそこから生じるゆとり（見てやらなければならないのに見れないと言う葛藤や軋轢がないこと）は担任・子ども・保護者にとってもゆとりを持って接することになり，すべて相乗効果になりプラス方向に働いていったと思う（なかった場合を想定するとどうなっていることかと恐くなる）。全ての教育活動においてせっぱつまった状況はお互いを追い込むことになりよくない。その点，1年入門期のはばたきプランの効果は大であったと思う。

「1年生学級の適正規模：5）26～30人（これ以上だと十分な支援・指導が行き届かない）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（一人一人にかかわれる時間が多くなり指導も徹底する）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

【担任③】

属性：女性，40歳代，教職経験年数25年目（現任教4年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

・一人一人の子どもに目が行き届きやすく，学習・生活指導面でプラスになったと思う。
・保護者の連携も密になったように思う。

「1年生学級の適正規模：5）26～30人（一人一人に目が行き届き，しかも集団活動するのに適正な人数だと思う）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（一人一人にかかわれる時間が多くなり指導も徹底する）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

・改善課題：もっときめ細かく入門期の指導に対応できるよう（35人超過ではなく）30人までに適用を拡大していただきたい。

【傾向】

校長・3担任ともに「非常に成果があった」と評価している。1年生学級の適正規模としては1担任が「21～25人」，校長と2担任が「26～30人」と回答が分かれていたが，小学1年生を学校「入門期」と見て，安定した少人数学級で一人一人に目を行き届かせて行きたいとする共通した志向がうかがえた。また校長は，少人数学級編制に加えてさらに加配教員のあることが望ましいとしていた。

○2028校：全校児童500人台・20学級，1年生一加配後4学級・1学級平均27.3人（国の標準：3学級・36.3人）

【校長】

属性：女性，56～60歳，教職経験年数36年目（現任教2年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

- ・1学級当たり9名程度の児童数が減ったので、毎日一人に関わる担任の目や心が行きわたりやすかった。
- ・本読み・発表・ノートやプリントの点検など、全てが短い時間にできた。そのため個人差に応じたきめ細かな基礎の指導がしやすかった。

「1年生学級の適正規模：5）26～30人（個人差が著しい場合は30人以下、それほどでもなければ集団としては31～35人が望ましいと思う。低学年はできるだけ26～30人学級）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（1年生は固定した学級集団で学習し落ち着いた場を作りたい。30人以下で）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：「生きる力」を育成する教育は1年生一人一人の発達の状況を把握し、その子によりそった指導をして行くことでもあると考える。／個人差をどう受容し、一人一人を伸ばして行くか。それは30人程度の少人数の学級で担任がゆとりをもって対応できる状況を作ることと教諭の研修にかかっていると思う。

【担任①】

属性：女性，40歳代，教職経験年数12年目（現任校1年目），1年生の担任経験？。

「成果？」

- ・一人一人にしっかりかかわられて学力がついてきた。
- ・子ども達のがびのびと過ごせた。
- ・家庭へのとりくみや保護者の方々との連携がとりやすかった。
- ・全員が活躍する（主人公になる）場面が増えた。

「1年生学級の適正規模：3）16～20人（一人一人に十分かかわれるため）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（担任が一人で少人数の子どもに関わって行くことが望ましい）」「はばたきプランの改善充実：3）その他：全学年に導入。」

- ・改善課題：各クラス20～25人にして細かな指導をして行く。／一人一人にしっかりとかわり豊かな人間性を育てて行く。

【担任②】

属性：女性，40歳代，教職経験年数22年目（現任校8年目），1年生の担任経験あり。

「2）ある程度あった」

「1年生学級の適正規模：4）21～25人」「望ましい施策：？」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

【担任③】

属性：女性，40歳代，教職経験年数24年目（現任校5年目），1年生の担任経験あり。

「2）ある程度あった」

「1年生学級の適正規模：4）21～25人」「望ましい施策：？」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

【担任④】

属性：女性，40歳代，教職経験年数27年目（現任校6年目），1年生の担任経験あり。

「2）ある程度あった」

- ・昔に比べて人数は少なくなっても、児童の実態がより課題をもつ子が増えてきているので、数人の減少ではあまり効果は大きく見られない。けれど、一人一人への対処は人数が少なければそれだけ関わる事ができると思います。

「1年生学級の適正規模：3）16～20人（20人前後，一人一人の要求や思いをしっかりと受け止めることができる）」「望ましい施策：？」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

・改善課題：14年度は2年生も適用になりますので低学年の時は指導は細かくできると思います。できれば，この体制が全学年になればと願っています。／25人までの少人数になればと思います。

〔傾 向〕

校長は「非常に成果があった」としているが，無記入の一人を除く3担任はともに「ある程度あった」と評価している。1年生学級の適正規模として，校長は加配後の27.3人と同様の「26～30人」としているのに対して，2担任が「21～25人」を，他の2担任が「16～20人」を望ましいとしている。安定的な少集団で個人差に配慮しようとする志向は共通しているが，1年生学級がどの程度の規模ならそれが可能と見るかにおいて，校長と担任間に意識差がうかがえた。

○2031校：全校児童700人台・23学級，1年生一加配後4学級・1学級平均27.8人（国の標準：3学級・38.0人）

〔校 長〕

属性：女性，51～55歳，教職経験年数32年目（現任校1年目），1年生の担任経験あり。

〔1）非常に成果があった〕

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（一人一人に目が行き届く，集団としての生活・学びができる）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（30人以下の少人数学級編制が望ましい。複数担任・TT等との連絡調整の時間確保が難しい現状があるため，少人数学級編制が良い）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる（次第に全学年に広げる）。」

・改善課題：個に応じたきめ細やかな指導を，さらに計画的・具体的に行っていく。／低学年だけの少人数編制ではなく，全学年少人数編制にしていきたい。そうすれば，個に応じたきめ細やかな指導が行き届き，学力向上をさらに高めることができる。

〔担 任〕

属性：女性，40歳代，教職経験年数21年目（現任校1年目），1年生の担任経験あり。

〔1）非常に成果があった〕

- ・学習面・生活面において個へのかかわりができ，支援や指導が行きわたった。
- ・教室の環境も整いやすく心にもゆとりが生まれた。

「1年生学級の適正規模：3）16～20人」「望ましい施策：1）少人数学級編制（25人）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

・改善課題：個に応じた支援・指導の必要性が年々深く感じられるのでTTや複数担任制または少人数学級編制の導入を望む。

〔傾 向〕

校長・担任ともに「非常に成果があった」としているが，1年生学級の適正規模としては，校長は「21～25人」，担任は「16～20人」と，加配後の27.8人よりさらに少人数を望んでいた。なお校長は，複数担任・TTの場合は連絡調整の時間確保が難しいと見ていた。

3）事業の実際：「補助教員」タイプ（例示13校／調査対象43校）（設問A・B・D・E）

次には，同様に校長と担任の双方から回答のあった「補助教員」タイプの13校を例示する。

「補助教員」タイプは資料1にもあるように，小学1年生における「35人超過の学級」が2学級以

下の学校に非常勤講師1人を各学級に加配することによって「35超過～40人」学級を担任と非常勤講師（週23時間）で運営するタイプである。「学級分割」タイプに比して学級規模では条件は改善されていないが、時間限定とは言え複数のスタッフが教室に居るメリットも予測される。

○1004校：全校児童300人台・13学級，1年生－2学級・1学級平均36.5人

[校長]

属性：女性，51～55歳，教職経験年数35年目（現任校3年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

- ・学習や生活面の指導においてきめ細かく指導することができた。
- ・子ども・保護者からも喜ばれたプランである。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（きめ細かな指導とある程度の集団が必要である）」「望ましい施策：？」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする＋2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：1・2年生に限らずはばたきプランを実施してほしい。／対象を35人超過学級とせず，30人くらいまで幅を持たせると良いと思う。

[担任①]

属性：男性，20歳代，教職経験年数1年目（現任校1年目），1年生の担任経験あり（講師時代を含む）。

配置された非常勤講師の属性：女性，20歳代，講師経験なし。

「1）非常に成果があった」

- ・個々の児童の理解度に応じて個別指導ができた。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（1時間の授業の中で子ども達の学習状況を把握できる限界の人数だと思うため）」「望ましい施策：2）複数担任によるTT（1年生では学習面だけでなく生活面での指導・支援も重要な要素となるため，1学級内に複数担任がいる方が関わりが多く持てる）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：講師の勤務時間を常勤に。

[担任②]

属性：女性，30歳代，教職経験年数16年目（現任校1年目），1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：女性，30歳代，講師経験？。

「2）ある程度あった」

- ・学習の遅れがちな児童に対して個別指導が手厚くできる。
- ・子ども達の学習活動に対して評価ができるだけ早くできるので次の学習へとつなげられる。
- ・トラブルが起きたとき，一人が対応し，もう一人が全体につける。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（ある程度の集団がないと人間関係づくりの基礎ができない）」「望ましい施策：2）複数担任によるTT（1年生は待てる時間が短いので二人の方が適切な対応ができる）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：（年度途中でなく）4月から開始。／小集団学習が可能となるように教室の数の確保。／講師の勤務時間を常勤に。

[傾向]

校長と1担任が「非常に成果があった」，他の1担任が「ある程度あった」としている。1年生学

級の適正規模としては、3人とも「21～25人」を希望していた。その上で、2担任はともに望ましい施策として「複数担任によるTT」を挙げ、1年生での複数担任制のメリットを記述していた。また、非常勤講師の常勤化をそろって訴えていた。

○1006校：全校児童200人台・11学級、1年生－1学級・1学級平均40.0人

【校長】

属性：性別？、56～60歳、教職経験年数37年目（現任校4年目）、1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

- ・2人の教師が指導内容・方法について話し合い、授業をしていた。また、それぞれ得意分野で活躍する部分もあり、児童に良い影響を及ぼした。
- ・生活指導面でとても気になる児童がいたが2人だと対応しやすい。

「1年生学級の適正規模：3）16～20人（きめ細かい指導ができる）」「望ましい施策：3）学級分割とTTの組み合わせ」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

- ・改善希望：1クラスに2名の指導より、2つのクラスに1名ずつの指導の方が学級経営や教科指導の上でより効果的である。非常勤講師の先生でもしっかり連携をとればクラス担任として十分やれるはずである。

【担任】

属性：女性、40歳代、教職経験年数29年目（現任校9年目）、1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：女性、20歳代、講師経験あり。

「1）非常に成果があった」

- ・きめ細かく指導することができた。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（指導しやすい）」「望ましい施策：3）学級分割とTTの組み合わせ（小人数指導を加味）」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする。」

- ・改善希望：得意教科を分担して授業をする。

【傾向】

校長・担任ともに「非常に成果があった」としているが、1年生学級の適正規模としては「16～20人」ないし「21～25人」を希望していた。その上で、校長・担任ともに望ましい施策として「学級分割とTTの組み合わせ」を挙げていた。校長の自由記述からは、少人数学級への分割を基本にして合同のTT場面を組み込みたい意向がうかがえた。また、担任からは、非常勤講師を補佐役に留めずに、得意教科で分担する方式が提示された。

○1007校：全校児童400人台・14学級、1年生－2学級・1学級平均35.5人

【校長】

属性：男性、51～55歳、教職経験年数31年目（現任校5年目）、1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

- ・よりきめ細かい指導ができるようになり、学力だけでなく、学習習慣・生活習慣へも目が行き届くようになった。
- ・TTの形態での指導により、遅進児への個別指導が全体の授業の流れの中で可能になったため、学力の底上げに効果があった。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（全員に配慮が行き届く）」「望ましい施策：1）少人数学

級編制(多様化する児童に対応するためには25人程度が限度である)」「はばたきプランの改善充実: 2) 2年生に広げる。」

・改善希望: 授業方法にある程度の実践が積み上げられたが, 評価方法への研究の余地がある。/ 今回の対象が教科指導時間だけであるので, 子ども達の学校生活すべての時間に指導ができるような非常勤講師の勤務が必要である。

[担任①]

属性: 女性, 40歳代, 教職経験年数21年目(現任校7年目), 1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性: 女性, 30歳代, 講師経験あり。

「2) ある程度あった」

- ・学習遅進児に対する指導が充実した。
- ・緊急時(鼻血が出た, おもらしをした, 欠席者の連絡がない等)に学級を停滞させなくてよかった。
- ・校外学習時によく目が届いた。

「1年生学級の適正規模: 3) 16~20人(一斉授業において指導者の話す内容を把握するのに適当な人数であり, 児童が自分の思いを素直に表現しても他の児童や指導者に届く人数である)」「望ましい施策: 1) 少人数学級編制(20人)」「はばたきプランの改善充実: 1) 1年生を少人数学級編制にする。」

・改善課題: 5月からの実施だったので4月より開始されたい。/担任と同じ勤務時間を確保してほしい。

[担任②]

属性: 女性, 50歳代, 教職経験年数30年目(現任校3年目), 1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性: 男性, 20歳代, 講師経験なし。

「2) ある程度あった」

- ・入学当初, 教室には入れない子がいたので, その子についてもらうことができた。
- ・学習面では理解の遅い子の指導についてもらえた。
- ・校外学習の時, 目が良く届いた。
- ・ノートの点検等, 分担することによって手際良くできた。
- ・子ども達にとっても話を聞いてもらえる教師が二人いることで満足度が違ったと思う。

「1年生学級の適正規模: 3) 16~20人(特に入学当初一人一人に手がかかるため, 少ない方がよい)」「望ましい施策: 1) 少人数学級編制(30人)」「はばたきプランの改善充実: 2) 2年生に広げる。」

・改善課題: 年々担任の手にかかる1年生が増えていると思います。そのためにも1学級の人数を減らしてもらう必要があります。/また, T Tで補助していただくことも子ども達にとってとても良いことでした。/35人超過という限定なしにT T制度があれば理想です。

[傾向]

校長は「非常に成果があった」, 2担任は「ある程度あった」としている。1年生学級の適正規模としては「16~20人」(2担任)ないし「21~25人」(校長)を希望しており, 望ましい施策はともに「少人数学級編制」としていた。その上で, 学習遅進児等への指導, 校外学習時や緊急時の配慮などに成果を上げた「補助教員」タイプの経験を踏まえて, T T加配を望む声も聴かれた。

○1008校: 全校児童200人台・11学級, 1年生—1学級・1学級平均37.0人

【校長】

属性：女性，56～60歳，教職経験年数37年目（現任校3年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

・個別指導が必要な子どもが数名いるがその対応ができて非常に良かった。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（少人数で一人一人に対応した指導ができる）」「望ましい施策：1）少人数学級編制」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする＋2）2年生に広げる。」

・改善課題：やはり1学級20～25人にして少人数で指導できる形が良い。

【担任】

属性：女性，30歳代，教職経験年数14年目（現任校4年目），1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：男性，20歳代，講師経験なし。

「1）非常に成果があった」

・学習に遅れのある子，身の回りの子とに時間のかかる子に，個別に指導にあたることができた。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（一人一人の個性・発達段階に応じて指導できる）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（25人）」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする。」

・改善課題：二人教員がいると意思の疎通が難しい。話し合う時間が少ない。

【傾向】

校長・担任ともに「非常に成果があった」とし，学習に遅れのある子・配慮の必要な子への個別指導での成果が共通して記述されている。一方，1年生学級の適正規模としてはともに「21～25人」を希望しており，望ましい施策としても「少人数学級編制」を挙げていた。

○1013校：全校児童400人台・15学級，1年生－2学級・1学級平均38.0人

【校長】

属性：女性，51～55歳，教職経験年数32年目（現任校6年目），1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

・指導が個別にできるので良い。

「1年生学級の適正規模：5）26～30人（目・指導が行き届く）」「望ましい施策：1）少人数学級編制」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

・改善課題：全学年に広げてほしい。

【担任】

属性：女性，40歳代，教職経験年数22年目（現任校6年目），1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：女性，20歳代，講師経験あり。

「2）ある程度あった」

・学習では半分を見て指導できて良かったし，低位の子にとってよく目が行き届いた。子どもも安心していた。問題を起こした子や病気の子にじっくり対応でき，他の子をきちんと見てもらうこともできた。保護者も先生と一緒に遊んでもらえると喜んでいて，細かい指導もしてもらえらることも等，感謝された。

「1年生学級の適正規模：5）26～30人（人数が少なすぎるとグループ活動に活気が欠けるため）」

「望ましい施策：？」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする。」

・改善課題：非常勤講師の場合、打ち合わせ時間はボランティア活動をしてもらっている状態のため、勤務時間を考慮しなければ、幅広い活動はしにくい。

[傾 向]

校長は「非常に成果があった」、担任は「ある程度あった」としている。「補助教員」タイプによる低位の子・問題を起こした子・病気の子などへの個別配慮の良さは認めた上で、1年生学級の適正規模としてはともに「26～30人」を挙げ、1年生の「少人数学級編制」を希望していた。

○1018校：全校児童200人台・10学級、1年生－1学級・1学級平均39.0人

[校 長]

属性：女性，56～60歳，教職経験年数35年目（現任校1年目），1年生の担任経験あり。

「2）ある程度あった」

・子どもへの対応（学習面・生活面）はやはり細やかになった。しかしながら、子どもにつける力の面で効果が上がったとはあまり思えない。

・14年度は少人数指導（国・算）をしてもらえるよう話している。

「1年生学級の適正規模：5）26～30人（少人数だから易しいとは思っていないが、今日の子どものことを考えると5）あたりが適当）」「望ましい施策：？（40人でTTや少人数指導を組み合わせるのが良い）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

・改善課題：特に低学年問題があるとは思っていない。問題は全ての学年にある。それを引き受けつつ、子どもの本来持っている輝きを引き出す力量を教師が見につけていくような研修や管理職としての支援をしてきたつもりだし、今後もしていきたいと考えている。

[担 任]

属性：女性，50歳代，教職経験年数？年目（現任校1年目），1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：女性，30歳代，講師経験あり。

「1）非常に成果があった」

・T1が授業を進めている間、子どもを側面から見てサポートしてくれた。

・トラブルがあった時など、対応しながら授業も進めることができた。

・どちらかが子どもの話し相手になり得て、子ども達も落ち着いた。

・子ども達のノートやプリントがその日のうちに子ども達に返せて、間違いはすぐ直させることができた。

・休憩時間に一緒に遊ぶ時間ができた。

「1年生学級の適正規模：3）16～20人（みんなの声がゆっくり聞けそう）」「望ましい施策：？」

「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする＋2）2年生に広げる。」

・改善課題：非常勤でなく、常勤と同じ時間勤務であれば、教材研究や打ち合わせがしっかりでき、少人数指導もやりやすくなる。

[傾 向]

校長は「ある程度あった」、担任は「非常に成果があった」としている。1年生学級の適正規模としては校長の「26～30人」に対して担任は「16～20人」を希望していた。校長は、低学年に留まらず「問題は全ての学年にある」と認識しており、教師の力量形成も重視していた。

○1020校：全校児童300人台・13学級、1年生－2学級・1学級平均37.0人

〔校 長〕

属性：男性，51～55歳，教職経験年数30年目（現任校2年目），1年生の担任経験なし（3年生以降はあり）。

〔1〕非常に成果があった〕

- ・指導が徹底する。
- ・児童が落ち着いている。（どちらかの先生に話しかけたり話しかけられたりすることが多く，気持ちが安定している。）
- ・保護者の声を聞いても安心感を感じる。

〔1年生学級の適正規模：4〕21～25人（学習規律等を早い時期に徹底するためには少人数が良い。また，集団での生活体験をするために，この程度の人数がいいのではないかと思う。〕〔望ましい施策：2〕複数担任によるTT（複数の担任で指導をすとお互いの指導について助言し合える）〔はばたきプランの改善充実：2〕2年生に広げる。〕

- ・改善課題：複数の担任での取り組みは非常に良いが35人を越えた人数でなく30人（できれば25人）を越えたら複数担任制にしていきたい。

〔担 任〕

属性：女性，30歳代，教職経験年数17年目（現任校6年目），1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：女性，20歳代，講師経験なし。

〔1〕非常に成果があった〕

- ・子どもが学校生活に慣れて行くのがスムーズであった。
- ・一人でやってきたこと（教室掲示，教材準備，学力補充）がTTのおかげで随分効果的にできた。
- ・色々な価値観があることが再認識できた。

〔1年生学級の適正規模：4〕21～25人（目が行き届く，子ども同士で活動できる，小グループ）〔望ましい施策：2〕複数担任によるTT（30人超過学級を対象に。最初から少人数よりも集団生活を経験させながらサポートして行く方がよい）〔はばたきプランの改善充実：2〕2年生に広げる。〕

- ・改善課題：35人超過でなく，30人超過に対象枠を広げて良いと思う。

〔傾 向〕

校長・担任ともに「非常に成果があった」としている。1年生学級の適正規模としてはともに「21～25人」を希望していたが，望ましい施策としては複数担任制のメリットを踏まえて「複数担任によるTT」を挙げていた。校長は，30人（できれば25人）超過学級を対象に複数担任制にしてほしいと述べている。

○1024校：全校児童200人台・8学級，1年生－1学級・1学級平均36.0人

〔校 長〕

属性：男性，56～60歳，教職経験年数38年目（現任校4年目），1年生の担任経験なし（3年生以降はあり）。

〔2〕ある程度あった〕

- ・個々の児童への対応がある程度できる（細かく接する）。
- ・落ち着いた状況の中で学習が進められている。
- ・一学期は生活習慣，学習習慣を身につけさせるのに効果があった。二学期以降は学習内容を定着させるためにはよかった。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（一人担任で児童に目が行き届く範囲）」「望ましい施策：2）複数担任によるT T（30人超過学級に対して。個への対応一立ちまわらる子・集中できない子—を考えると複数担任が良い）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」
 ・改善課題：40人の学級編制基準を下げる（30人程度）。／低学年は複数担任制（T T等を含む）がよいと思う（授業に参加できない子の世話等）。

[担任]

属性：性別？、40歳代、教職経験年数？年目（現任校4年目）、1年生の担任経験？。

配置された非常勤講師の属性：女性、30歳代、講師経験あり。

「2）ある程度あった」

- ・低学年の児童は体調を崩しやすく、その子へ対応しているとき、全体の児童への指導が中断することなく指導できた。
- ・個々のつぶやきや疑問に細かく対応できる。
- ・生活指導、ノート指導など個別指導がより丁寧にできる。
- ・課題のある子への対応がしやすく、落ち着いてきた。

「1年生学級の適正規模：2）11～15人」「望ましい施策：1）少人数学級編制（30人）」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする。」

- ・改善課題：一年生にとって学習よりも生活指導の対応が大切である。例えば、給食指導、下校指導、朝のしたく等。しかし、今のはばたきプランは学習時間に限られている。また、アルバイト的な対応になってしまって、担任の負担が大きい。より効果的な指導を行うには、少人数学級の方が落ち着いて学習に取り組んでいけると思う。

[傾向]

校長・担任ともに「ある程度あった」としている。1年生学級の適正規模としては、校長は「21～25人」としているのに対して、担任はさらに小規模の「11～15人」を希望していた。望ましい施策としては、校長が「複数担任によるT T」を挙げていたのに対して、担任は「少人数学級編制」を選んでいった。担任は、補助教員が「学習時間」に限定された配置と補助に留まったアルバイト的な対応になっており、担任の負担が大きかったと感じていた。

○1029校：全校児童300人台・13学級、1年生—2学級・1学級平均37.0人

[校長]

属性：女性、56～60歳、教職経験年数35年目（現任校1年目）、1年生の担任経験あり。

「1）非常に成果があった」

- ・個々への対応がきめ細かにでき、児童一人一人が聞いてもらえる・認めてもらえるという安心感を持つことができ、学習へのやる気と集中力が見られた。
- ・1時間1時間の中でドリル学習やノート指導が個にに応じてできたこと。また、即評価を返して行くことができたことでやる気を高め基礎学力の定着につながっている。
- ・複数教員による特性を生かしたり、多様な工夫ができ、教材教具も多様なものが提示できた。
- ・突発的な出来事も即対応できるほか、他の児童を待たせたり、動揺させないで対応できた。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（子どもの思いが聞けたり、学習指導等においてきめ細かな指導ができる）」「望ましい施策：3）学級分割とT Tの組み合わせ（30人超過学級に対して）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：非常勤という勤務形態のため、打ち合わせの時間確保が難しい。また、朝の会や給食・掃除・終わりの会などの時間は非常勤講師の指導時間でなく矛盾が生じた。

[担任①]

属性：女性，40歳代，教職経験年数27年目（現任校2年目），1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：女性，20歳代，講師経験なし。

〔1〕非常に成果があった〕

- ・子ども一人一人の気持ちの的確につかめる。
- ・一人一人の計算力とか，ひらがな・漢字の習得，作文指導など，二人いるので丁寧に見ることができた。
- ・保護者も人数が多く不安がられていたが二人体制で安心された。

〔1年生学級の適正規模：4〕21～25人（4人班で5～6班程度が落ち着く）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（30人）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：学習時間に限定されているため，校外活動（特に社会見学等）など一緒に行けず，安全面で不安だったり，子どもも残念がっていた。／研修を保障してほしい。

[担任②]

属性：女性，40歳代，教職経験年数27年目（現任校3年目），1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：女性，20歳代，講師経験なし。

〔1〕非常に成果があった〕

- ・一人一人に声をかけたり，作業を一緒にしたりなど，学習面，生活指導全般にわたり，子どもが安心して学校に来ることができた。
- ・こうした子ども達の安定により，保護者も安心して一年間を送ることができた。

〔1年生学級の適正規模：5〕26～30人（少なすぎると学級の力や人との関係において深みのあるものになりにくい。多すぎると一人一人に目が届かなかったり，声がかけれなかったりする。また，子ども達も発言などにおいての機会が少なくなる。）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（30人）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：地域や家庭でできないものが全てにわたり学校に任されてしまってきている。学習ができる状況になるまでは時間講師という形ではなく，学校に一日申いて，子どもに接することができたり，行事などに参加できるようにする。子ども達が学校に来る日は終日出勤できるようにすることが望ましい。

[傾向]

校長・2担任ともに「非常に成果があった」としている。1年生学級の適正規模としては，校長と1担任が「21～25人」，他の1担任が「26～30人」としていた。望ましい施策としては，校長が「学級分割とTTの組み合わせ」を挙げていたのに対して，2担任は「少人数学級編制」を選んでいった。遊び時間や校外学習にも非常勤講師が対応している学校があった一方で，この学校では「学習時間」に限定されていた模様で，勤務時間や形態への不満が共通して述べられていた。

○1030校：全校児童200人台・7学級，1年生－1学級・1学級平均38.0人

[校長]

属性：女性，51～55歳，教職経験年数32年目（現任校5年目），1年生の担任経験あり。

〔2〕ある程度あった〕

- ・一人の子どもに多くの時間かかわることができた。
- ・指示したことを多くの子どもに徹底させることができた。

「1年生学級の適正規模：5）26～30人（指導の徹底を図るため）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（30人）」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする＋2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：非常勤講師との打ち合わせ（教材研究）の時間がほしい。

【担 任】

属性：女性，40歳代，教職経験年数24年目（現任校2年目），1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：女性，30歳代，講師経験あり。

「3）どちらとも言えない」

- ・細かな指導は個に応じてできた。
- ・しかし，子どもは甘い方に行くので，学習規律が確立しにくかった。TTで徹底し規律を確立することが大切。副担が書き順が違っていると思い，子どもにもう一度ノートに書くように言っても書かずにいた。私が見かねて書くように言うと，泣きながら書いていた。副担もこれでは本気で指導しにくいと感じた。

「1年生学級の適正規模：2）11～15人（一人が見て回れて，ノートやプリントをきちんと見れる人数）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（20人）」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする。」

- ・改善課題：少人数といっても，細かな規律は大切なので，TTでやった方がいい。しかし，副担の力量が発揮しにくいし，保護者も副担を軽んじているように思う。すぐ授業をすることになるので児童理解の研修もできなかった。互いに研修する時間が必要で，授業だけしか来られないのでは無理であろう。

【傾 向】

校長は「ある程度あった」としていたが，担任は「どちらともいえない」としている。その理由は，担任と非常勤講師との間で打ち合わせや研修の時間がとれないために，TT間で指導方針が統一できず，「学習規律」が確立しにくかったことがうかがえた。1年生学級の適正規模としては，校長が「26～30人」としていたのに対して，担任は「11～15人」としていた。望ましい施策としては，ともに「少人数学級編制」を挙げていた。

○1031校：全校児童400人台・12学級，1年生－2学級・1学級平均38.5人

【校 長】

属性：男性，56～60歳，教職経験年数36年目（現任校2年目），1年生の担任経験なし（3年生以降はあり）。

「2）ある程度あった」

- ・TT形式のため，学級で学習面・生活面において，配慮を要する子どもに指導が十分できた。

「1年生学級の適正規模：3）16～20人（一人一人にきめ細かな指導を徹底するため）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（30人）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

- ・改善課題：「小1プロブレム」については，家庭における過保護や放任に対し対策を練ることと，規律を重んじる幼児教育への改善を図る。／「はばたきプラン」では1・2学年に拡大し，担任と講師の連携の時間を十分確保できるように改善すべきである。

【担 任①】

属性：女性，30歳代，教職経験年数13年目（現任校？年目），1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：女性，20歳代，講師経験あり。

「2）ある程度あった」

・保護者が一人一人をしっかりと指導してもらえるとという点で関心が高かった。

「1年生学級の適正規模：5）26～30人（一人で本当に行き届く程度はこのぐらいの人数）」「望ましい施策：？」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

【担 任②】

属性：女性，40歳代，教職経験年数28年目（現任校2年目），1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：女性，20歳代，講師経験なし。

「1）非常に成果があった」

・一年生段階では生活・学習の較差が大きく，ある程度学級が運営できるまで個別的に指導して行きたいので二人態勢はとても助かった。

・今39人であるので，体験学習など二つに分けるとよく動けたり見たりできるのでよかった。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人」「望ましい施策：？」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする。」

・改善課題：1年生だけではなく，2年もあると良いと声を大にしていたら，2年まで継続になった。改善されてよかった。

【傾 向】

校長と1担任は「ある程度あった」，他の1担任は「非常に成果があった」としていた。1年生学級の適正規模としては，「16～20人」（校長），「21～25人」（1担任），「26～30人」（1担任）と分かれた。

○1034校：全校児童400人台・14学級，1年生－2学級・1学級平均38.5人

【校 長】

属性：男性，56～60歳，教職経験年数38年目（現任校5年目），1年生の担任経験なし（中学校免許のみ）。

「1）非常に成果があった」

・学習活動への導入期での学習規律・学習内容の定着。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（集団としての成立要因の最小人数）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（30人）」「はばたきプランの改善充実：2）2年生に広げる。」

・改善課題：30人学級の早期実現（常勤教諭の配置）。

【担 任①】

属性：男性，40歳代，教職経験年数20年目（現任校1年目），1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：女性，30歳代，講師経験あり。

「1）非常に成果があった」

・学力面での定着・向上に大いに役立った。

・担任としてプロデュースすることに余裕があった。

・子ども達にとっては受け皿が広がり，安心が生まれた。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人」「望ましい施策：1）少人数学級編制（30人）」「はばたき

プランの改善充実：1) 1年生を少人数学級編制にする+2) 2年生まで広げる。」

・改善課題：対象枠を30人超過に広げる。／学年実態に応じ、学校内で運用する。

[担任②]

属性：女性，40歳代，教職経験年数23年目（現任校3年目），1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：女性，20歳代，講師経験あり。

「1) 非常に成果があった」

- ・学力面の保障がかなりできた。
- ・学級通信を書くゆとりが持てた（ノート，プリント等を一部見てもらった）。
- ・子どもの話が一人よりは沢山きけた。
- ・校外に出る場合，安全確保の点で一人より安心だった。

「1年生学級の適正規模：4) 21～25人（一人一人をしっかり見ることができる）」「望ましい施策：

3) 学級分割とTTの組み合わせ（教科内容によっては人数が少なくても一人では難しいものもある）」「はばたきプランの改善充実：1) 1年生を少人数学級編制にする。」

・改善課題：まず学級規模を30人以下（できれば先進国並に25人以下）にする。／講師を「授業のみ」とせず，子どもに関わる全てについて勤務を保障する（今は行事・運動会・遠足等は勤務でないなど困ることが沢山ある）。／保護者の学習（子育て）を進める。

[傾向]

校長・2担任ともに「非常に成果があった」としていた。1年生学級の適正規模としても，ともに「21～25人」を希望していた。望ましい施策としては，校長と1担任が「少人数学級編制」，他の1担任が「学級分割とTTの組み合わせ」を挙げていた。

○1043校：全校児童300人台・14学級，1年生－2学級・1学級平均35.5人

[校長]

属性：男性，46～50歳，教職経験年数22年目（現任校3年目），1年生の担任経験なし（2年生以降はあり）。

「2) ある程度あった」

- ・教科学習において個別指導を加えながら授業の展開ができた（特に基礎的・基本的内容について）。
- ・学習規律や基本的な生活習慣など細やかに指導できた。
- ・二人の教師の得意な能力を生かした指導で，子ども達が意欲を持って取り組むことができた。
- ・水泳指導など安全な指導が必要な内容において安心してとりくめた。など

「1年生学級の適正規模：(30人前後の規模)」「望ましい施策：1) 少人数学級編制(30人)」「はばたきプランの改善充実：1) 1年生を少人数学級編制にする。」

・改善課題：非常勤講師の勤務形態に融通をもたせる。時間割による拘束でなく，始業から最終授業時間終了後少なくとも1時間は勤務の状態とする。即ち，放課後に翌日等の打ち合わせの時間が必要である（非常勤講師は授業時間だけが勤務の状態となっている）。小学校では休憩時間，給食時間，清掃時間等の指導も重要である。

[担任①]

属性：女性，40歳代，教職経験年数25年目（現任校4年目），1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：女性，20歳代，講師経験あり。

「2) ある程度あった」

- ・教科学習において個別指導を加えながら授業の展開ができた。
- ・学習規律や基本的な生活習慣など細やかに指導できた。
- ・子ども一人一人にゆとりをもって接し指導できた。

「1年生学級の適正規模：4）21～25人（ある程度の集団遊びがある。多くの子と接して良さをみつけていくことができる）」「望ましい施策：1）少人数学級編制（1年生は授業だけでなく、学習・生活習慣の基礎となるので、毎日毎日1時間ずつ重ねて、細かく指導して行くことが必要である）」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする。」

- ・改善課題：生活時間にも指導できるよう講師の時間を考慮する。／打ち合わせの時間が必要である。

[担任②]

属性：女性，50歳代，教職経験年数32年目（現任教1年目），1年生の担任経験あり。

配置された非常勤講師の属性：女性，20歳代，講師経験あり（高等学校）。

「2）ある程度あった」

- ・T1が学習を進めている時，T2が集中できない子への声かけができた。
- ・基本的な生活習慣など二人で指導しているので，より細かな指導ができた。
- ・読み書き計算などの繰り返し練習のとき，二人で指導できるので良かった。
- ・水泳などの実技指導では，子どもへの声かけがより具体的にできた。など

「1年生学級の適正規模：5）26～30人」「望ましい施策：1）少人数学級編制（30人）」「はばたきプランの改善充実：1）1年生を少人数学級編制にする。」

- ・改善課題：子ども姿が見えるところは休憩時間・給食時間などが多いので，勤務時間を子どものいる時間にしてほしい。

[傾向]

校長・2担任ともに「ある程度あった」としていた。1年生学級の適正規模としては，「21～25人」（1担任），「26～30人」（1担任），「30人前後」（校長）と分かれたが，望ましい施策が「少人数学級編制」である点では共通していた。また，非常勤講師の勤務時間の改善を3人いずれもが述べていた。

Ⅲ. 小学校1年生における教員配置・学級編制施策の在り方

1. 1年生における適正な学級規模（設問B・D）（表3・4・5）

1年生における適正な学級規模に関しては，22校の例示記述において既に触れたが，回答全体の結果を改めてまとめてみる。

表3 担任による現在の学級規模への意識

現在の学級規模 記入件数	26～30人 30	31～35人 19	36～40人 26	41人～ 1
大きい	1(3)	1(5)	20(77)	1(100)
やや大きい	13(43)	9(47)	5(19)	—
ちょうどよい	16(53)	9(47)	1(4)	—

表3に，担任による現在の学級規模への意識を示した。「ちょうどよい」と回答したのは，「26～30人」が53%，「31～35人」が47%であった。「36～40人」は，1人を除く25/26人が「大きい」

「やや大きい」と回答していた（なお、表3で「41人～」とあるのは、年度途中の転入によって40人を超過したケースである）。ただし、表3の回答は、子ども達を掌握して学級づくりも進んだ年度末の調査時点での状況、つまり実際に担任している学級の具体的な子ども集団や経営状態を反映していることが推測された。

表4 1年生における適正な学級規模

タイプ 校長・担任の別 記入件数	「学級分割」タイプ		「補助教員」タイプ	
	校長 10	担任 50	校長 22	担任 32
11～15人	—	—	—	2(6)
16～20人	—	8(16)	2(9)	6(19)
21～25人	4(40)	24(48)	14(64)	13(41)
26～30人	4(40)	18(36)	6(27)	11(34)
31～35人	2(20)	—	—	—

事実、表4に示すように1年生における適正な学級規模は、表3で示された「ちょうどよい」人数よりもやや小さな規模となっている。すなわち、4人を除く110/114人が16～30人の間を適正規模として選択しており、中でも「21～25人」が最も多く、次いで「26～30人」が多かった。担任に関して見れば、表3とは異なって、「31～35人」を選択した者はいなかった。

表5-1 学年による適正規模の相違

タイプ 校長・担任の別 記入件数	「学級分割」タイプ		「補助教員」タイプ	
	校長 11	担任 51	校長 23	担任 31
学年により異なる	7(64)	16(31)	9(39)	12(39)
16～20人	—	—	1(4)	1(3)
21～25人	—	2(4)	—	2(6)
26～30人	4(36)	10(20)	6(26)	8(26)
31～35人	3(27)	4(8)	2(9)	1(3)
異ならない	4(36)	35(69)	14(61)	19(61)

表5-2 加配教職員の有無による適正規模の相違

タイプ 校長・担任の別 記入件数	「学級分割」タイプ		「補助教員」タイプ	
	校長 11	担任 46	校長 23	担任 29
加配により異なる	7(64)	13(28)	12(52)	18(62)
16～20人	—	—	—	1(3)
21～25人	—	2(4)	—	1(3)
26～30人	4(36)	2(4)	5(22)	3(10)
31～35人	1(9)	8(17)	4(17)	12(41)
36～40人	2(18)	—	3(13)	1(3)
異ならない	4(36)	33(72)	11(48)	11(38)

表5-1は学年による適正規模の相違を問うた結果であるが、学年により適正規模が相違とする者においては、他学年について「26～30人」の選択が多かった。また、表5-2に示すように、加配教職員の有無によって適正規模が相違とする者においては、加配がある場合は「26～30人」

ないし「31～35人」の選択が多かった。

以上をまとめると、H県における今回調査の回答者にあつては、小学校1年生における適正な学級規模を「21～25人」（ないし「26～30人」）程度とし、学年によって適正規模が異なるとすれば他学年は「26～30人」程度、教職員加配の有無によって異なるとすれば加配がある場合は「26～30人」または「30～35人」程度が適当とみている傾向がうかがえた。

2. 1年生における望ましい教員配置施策（設問D）（表6・7）

表6は、1年生における望ましい教員配置施策を問うた結果である。第一に注目したいのは、国が現在進めている「主要教科等での少人数授業」を優先選択した者のないことである（例示記述で見たように、他の施策にプラスする付加選択としてはあった）。全体として「少人数学級編制」への希望が多かった。加えて、例示記述で既に見たように小学校1年生では複数担任制のメリットもあり、「補助教員」タイプを実施中の学校では「複数担任によるTT」や「学級分割とTTの組み合わせ」を希望する回答も見られた。

表6 1年生における望ましい教員配置施策

タイプ 校長・担任の別 記入件数	「学級分割」タイプ		「補助教員」タイプ	
	校長	担任	校長	担任
	9	41	20	24
少人数学級編制(学級分割)	9(100)	39(95)	11(55)	18(75)
複数担任によるTT	—	1(2)	6(30)	5(21)
学級分割とTTの組み合わせ	—	1(2)	3(15)	1(4)
主要教科等での少人数授業	—	—	—	—

望ましい教員配置施策としては優先選択されなかった「主要教科等での少人数授業」ではあるが、その効果についての意向を表7に示した。「学級分割」タイプの学校では8割が「実施していない」と回答していたが、「補助教員」タイプでは担任と非常勤講師との協力で何らかの試行がなされているようで、「大いに効果あり」「ある程度あり」の回答が校長で7割台、担任で5割台であった。ただし、例示記述の中には、1年生では集団を頻繁に組み替えるのではなく、少人数の安定した集団の確保に留意する必要性が述べられていた。

表7 1年生における主要教科等での「少人数授業」の効果

タイプ 校長・担任の別 記入件数	「学級分割」タイプ		「補助教員」タイプ	
	校長	担任	校長	担任
	10	44	22	29
大いに効果あり	2(20)	5(11)	11(50)	7(24)
ある程度あり	—	4(9)	5(23)	8(28)
むしろ弊害あり	—	—	—	—
実施していない	8(80)	35(80)	6(27)	14(48)

例示記述も加味してまとめると、小学校1年生においては「21～25人」（ないし「26～30人」）規模の少人数学級編制を行った上で、学習遅進児や配慮の必要な子への個別指導や、校外学習や緊急時の際の配慮・対応などの為にさらに何らかの加配教職員が確保されることが望ましいと見られていた。ただし、回答した担任・校長は、現在の日本の学校様式を前提としていると推測された。すなわち、伝統的な一斉指導を基本とした授業形式が見直されたり、通常の教育課程の共修が困難

な子ども達の統合教育⁶⁾が進むと、上記の適正規模にも変化が生じることが予測される。

3. H県における「小学1年生はばたきプラン」の改善策(設問D)(表8)

表8には「小学1年生はばたきプラン」の改善策への意向を示したが、調査時点では2年生への拡充が既に公表されていたことが後で判明した。従って、「『はばたきプラン』を2年生にも拡充」への回答の多さよりも、「補助教員」タイプで担任の過半数(57%)が「まず1年生に関して少人数学級化」を選択したことや、「学級分割」タイプで「その他」として少人数学級編制の他学年への拡充が挙げられていたこと等に注目すべきかも知れない。

表8 「小学1年生はばたきプラン」の改善策

タイプ 校長・担任の別 記入件数	「学級分割」タイプ		「補助教員」タイプ	
	校長	担任	校長	担任
	9	45	20	28
まず1年に関して少人数学級化	2(22)	6(13)	5(25)	16(57)
「はばたき」を2年生にも拡大	4(44)	29(64)	15(75)	11(39)
その他	3(33)	10(22)	—	1(4)

ところで、H県の「小学1年生はばたきプラン」は「学級分割」と「補助教員」という2タイプの方策を学級規模に応じて使い分けたことによって、双方の特徴を知る上で貴重な素材を提供してくれた。しかし、H県が独自に篤い施策を始めた小学1年生について、「はばたきプラン」が適用される学級とされない学級、適用されても常勤教諭加配で「少人数学級化」される学級と非常勤講師加配で「少人数学級化」されない学級という、結果的に3区分の対応較差を生み出した。仮に「35人超過の学級」が2学級以下の場合にも「学級分割」を導入していたとすれば、「2学級(71～80人)+1学級」の場合は「23.7～26.7人」、「1学級(36～40人)+1学級」の場合は「18.0～20.0人」となったはずである。換言すれば、H県の「小学1年生はばたきプラン」は「25人以下」への少人数学級化を結果的に避けた方策と理解できる。それは、常勤教諭を独自に確保する予算上の困難によるのか、「25人以下」は集団としてやや小さすぎるとの判断によるのか等、即断はできない。H県における試みの更なる展開に、引き続き注目していきたい。

「少人数だと一人一人活躍できる場も増えるし、教師の声かけやノートを見てもらう時間もふえ、良いことが多い。しかし、少なすぎると多様な意見(集団で思考していく時)は少なくなります。1年生では25人までかなと思います。30人くらい又は越えると教師の周りに集めても(読み聞かせや校庭での活動のときなど)後ろの子は距離感から、自分には関係ないという気になっています。集めた時、教師が手の内に入る人数が25人くらいまでと思う。……今一番必要なことは教材研究する時間の確保です。十二分な準備と指導後の整理・まとめのための時間は、一年担任でもほとんどとれません。会議・会議、そして授業に関係ない事務処理で費やされています。十分な教材研究・準備ができると、どんなにか子ども達に自分自身満足のいく授業が提供できるかと思います。自分の教師としての能力が十分発揮できる条件を作ることが重要です。週あたりの持ち時数を数教科にしばることです。」

最後に、例示記述した以外の貴重な自由記述回答として、40歳代の女性教師(教職経験年数27年目[現任校3年目])のものを紹介した。数量的に客観化できないながらも、例えば「手の内に入る」というような経験に裏付けられた勘や訴えを看過せずに、行政施策の改善充実に活かすことができればと思う。

なお、本稿で明らかなった調査結果の実態を訪問調査等によって確認する作業は行えていない。今後の課題としたい。

謝辞：調査に御協力いただきましたH県の皆様方に、記して感謝申し上げます。また、H県の「はばたきプラン」が2002年度には小学2年生にまで拡充されたように、貴重な試みの更なる発展を祈念しております。

追記：本稿は、平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)(研究代表者・渡部昭男 課題番号13610298)「義務標準法第7次改善計画に係る地方教育施策の研究」の成果の一部であり、日本教育学会第61回大会(於：福岡教育大学、2002年8月30日)において口頭発表した。

〈注〉

- 1) 渡部昭男(2002)『「小学校1年生問題」と教員配置・学級編制施策—T県における『小学校1年生支援事業』の効果—』『鳥取大学教育地域科学部 教育実践総合センター研究年報』第11号, pp.5-14。
- 2) 文部科学省の調査は、同省のHP (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/05/010525.htm) に掲載されている。ちなみに、本稿調査を実施した2001年度において「児童生徒数が一定数以上の場合に学級編制を弾力化する5県」は次のようであった。「A県：小学校1・2年, 30人程度の学級編制ができるよう教諭等を配置。N県：小学校1・2年, 30人程度(32人まで許容)以下の学級編制ができるようにする。H県：小学校1年, 学年3学級以上で1学級の平均児童数が35人を超える学校について35人以下で編制する。E県：小学校1年, 児童数が概ね100人を超える学校できめ細かな指導が必要な場合35人以下で編制する。中学校1年, 生徒数が概ね200人を超える学校できめ細かな指導が必要な場合35人以下で編制する。K県：小学校1年, 36人以上を2学級以上有する学校について35人以下で編制する。」
- 3) 調査用紙は担任用(「学級分割」タイプ・「補助教員」タイプ)と校長用(共通)の3種に分かれている(巻末に掲載)。まず担任用に関して見ると、「補助教員」タイプには「学級分割」タイプには設けていない「設問E」の(1)として非常勤講師(補助教員)の属性を尋ねる項目がある。次に校長用に関して見ると、「設問A」の回答者の属性における「年齢」の尋ね方が5年刻みとなっていること、「設問D」の「現在の学級規模」の項目に代わって「設問C」の続きとして「(2)就学前機関(幼保)と小学校との連携」を入れたことが、担任用と異なっている。
- 4) H県教育委員会(2001)『平成13年度 公立学校基本数』(平成13年5月1日現在)で、小学1年生の35人超過学級が確認できた学校である。なお、H県教育委員会の「小学1年生はばたきプラン」の説明資料(資料1)では、「学級分割」タイプが38校(常勤38人)、「補助教員」タイプが43校(非常勤69人)の見込みとなっているが、実際には「補助教員」タイプが増えて48校(非常勤75人)の配置であった。従って、「学級分割」タイプで1校、「補助教員」タイプで5校の計6校は未確認に終わった。
- 5) 尾木直樹(2000)『子どもの危機をどう見るか』岩波書店(p.89), 新保真紀子(2000)『「小1プロブレム」『学級崩壊』をともに越えるために—大同教『小1プロブレム』アンケートから見えてきたもの—』『解放教育』第30巻第1号(pp.65-77)。
- 6) 文部科学省の「今後の特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議」の出した「今後の特別支援教育の在り方について(中間まとめ)」(2002年10月21日)は、小中学校の通常学級に学ぶLD(学習障害)児等を「6.3%」と推計している。これは「40人学級に2人強」という比率である。

「【小学1年生はばたきプラン】の実態状況に関する調査(学校長用)」(調査票)

*特に指示がない時は、当てはまる項目の番号を○で囲み、その理由等もお聞かせ下さい。

設問A：回答者の属性

- (1) 性別 1. 女性 2. 男性
 (2) 年齢(3月末日現在)
 1. 20歳代 2. 30歳代 3. 40歳代 4. 50歳代 5. 60歳代
 (3) 取得教諭免許状(取得している全てに○)
 1. 小学校 2. 幼稚園 3. 中学校(教科名:)
 4. 養護学校 5. その他() ()
 (4) 勤務年数(講師経験も含む)
 現任校の勤務年数(年目) 及び 通算の教職経験年数(年目)
 (5) 小学校で今までに担任したことのある学年(全てに○)
 1年生 2年生 3年生 4年生 5年生 6年生 障害児学級 複式学級

設問B：適正な学級規模

- (1) 「加配のない一人担任制」の場合、貴方は小学校1年生においてどの程度が適正な学級規模であると思いますか。
 1. 10人以下、 2. 11~15人、 3. 16~20人、 4. 21~25人、
 5. 26~30人、 6. 31~35人、 7. 36~40人
 理由 _____
 (2) 上記で貴方が選んだ「適正な学級規模」は、①学年の違いや②加配の有無によって異なりますか。
a. 学年の違いによって異なる(他学年の場合の適正規模は?) b. 異なるない
 1. 10人以下、 2. 11~15人、 3. 16~20人、 4. 21~25人、
 5. 26~30人、 6. 31~35人、 7. 36~40人
 理由 _____
a. 加配の有無によって異なる(加配がある場合の適正規模は?) b. 異なるない
 1. 10人以下、 2. 11~15人、 3. 16~20人、 4. 21~25人、
 5. 26~30人、 6. 31~35人、 7. 36~40人
 理由 _____

- 調査用紙・1頁目(担任用共通) -

「【小学1年生はばたきプラン】の実態状況に関する調査(学校長用)」(調査票)

*特に指示がない時は、当てはまる項目の番号を○で囲み、その理由等もお聞かせ下さい。

設問A：回答者の属性

- (1) 性別 1. 女性 2. 男性
 (2) 年齢(3月末日現在)
 1. 41~45歳 2. 46~50歳 3. 51~55歳 4. 56~60歳
 (3) 取得教諭免許状(取得している全てに○)
 1. 小学校 2. 幼稚園 3. 中学校(教科名:)
 4. 養護学校 5. その他() ()
 (4) 勤務年数(講師経験も含む)
 現任校の勤務年数(年目) 及び 通算の教職経験年数(年目)
 (5) 小学校で今までに担任したことのある学年(全てに○)
 1年生 2年生 3年生 4年生 5年生 6年生 障害児学級 複式学級

設問B：適正な学級規模

- (1) 「加配のない一人担任制」の場合、貴方は小学校1年生においてどの程度が適正な学級規模であると思いますか。
 1. 10人以下、 2. 11~15人、 3. 16~20人、 4. 21~25人、
 5. 26~30人、 6. 31~35人、 7. 36~40人
 理由 _____
 (2) 上記で貴方が選んだ「適正な学級規模」は、①学年の違いや②加配の有無によって異なりますか。
a. 学年の違いによって異なる(他学年の場合の適正規模は?) b. 異なるない
 1. 10人以下、 2. 11~15人、 3. 16~20人、 4. 21~25人、
 5. 26~30人、 6. 31~35人、 7. 36~40人
 理由 _____
a. 加配の有無によって異なる(加配がある場合の適正規模は?) b. 異なるない
 1. 10人以下、 2. 11~15人、 3. 16~20人、 4. 21~25人、
 5. 26~30人、 6. 31~35人、 7. 36~40人
 理由 _____

- 調査用紙・1頁目(校長用共通) -

設問C：「1年生問題（小1プロブレム）」

(1) 「最近の1年生は以前の1年生と違ってきている」ということが言われますが、貴方はそう思いますか。

【子どもについて】

- | | |
|--------------------------------|-------|
| 以前に比べて | 3-2-1 |
| a) 担任等（教職員）に甘えるようになってきた。 | 3-2-1 |
| b) 片づけやあいさつなど、基本的なことができない。 | 3-2-1 |
| c) 他の子どもとうまくコミュニケーションがとれない。 | 3-2-1 |
| d) 言動が粗暴になってきている。 | 3-2-1 |
| e) 親の前では「良い子」に突身する。 | 3-2-1 |
| f) 習い事・お稽古事等が多くなっている。 | 3-2-1 |
| g) 早期教育を受けている子どもが増えた。 | 3-2-1 |
| h) 夜型の生活の子どもが増えた。 | 3-2-1 |
| i) 「ジコチュー児」（自己中心児）が増えた。 | 3-2-1 |
| j) 何かあるとすぐに「パニック」状態になる子どもが増えた。 | 3-2-1 |

その他、具体的に

【保護者について】

- | | |
|-------------------------------|-------|
| 以前に比べて | 3-2-1 |
| a) 子どもに過保護になった。 | 3-2-1 |
| b) 学校でのケガや服がよごれることに過敏である。 | 3-2-1 |
| c) 受容と放任の区別がつかない。 | 3-2-1 |
| d) 学校に常識はずれの要求をしてくる。 | 3-2-1 |
| e) 担任等（教職員）との関係がうまくとれない。 | 3-2-1 |
| f) 保護者の「モラル」が低下した。 | 3-2-1 |
| g) 保護者同士の横のつながりが弱まった。 | 3-2-1 |
| h) すぐに他の子のことと比べる。 | 3-2-1 |
| i) さまざまな情報（育児・教育雑誌等）による知識がある。 | 3-2-1 |
| j) 家庭で宿題等の学習をしっかりとみている。 | 3-2-1 |
| k) 父親が子育てや学校活動にかかわるようになった。 | 3-2-1 |
| l) 基本的な生活習慣を身につけさせることへの配慮が弱い。 | 3-2-1 |

その他、具体的に

設問D：1年生における教員配置施策

現在の学級規模

(1) 現在担任している貴方の学級の規模はいずれですか（3月現在、3学級以上校への「小学1年生はばたきプラン」による常勤教諭配置の場合は学級分割後の実人数）。

1. 26～30人、 2. 31～35人、 3. 36～40人

(2) 現在担任している学級の規模について、貴方はどのように感じていますか。なお、「小学1年生はばたきプラン」による非常勤講師加配の場合は、加配のない一人担任制と仮定してお答え下さい。

1. 小さい、 2. やや小さい、 3. ちょうどよい、 4. やや大きい、 5. 大きい

望ましい教員配置施策

(3) 全国的には少人数学級編制を独自に打ち出す自治体も出ています（添付資料⑥）。**一般的に見て、1年生の学年ではどのような教員配置施策が望ましいと思いますか。**

1. 40人学級編制を改めて、少人数学級編制（学級分割）を進める。
 具体的に：a. 35人学級編制 b. 30人学級編制 c. その他（人）
2. 40人学級編制のままで、ある規模以上の学級で複数担任によるTＴを進める。
 具体的に：a. 35人超過学級 b. 30人超過学級 c. その他（人）
3. 教科や学習課題に応じて、学級分割とTＴの双方を組み合わせて活用する。
 具体的に：a. 35人超過学級 b. 30人超過学級 c. その他（人）
4. 40人学級編制のままで、主要教科等での少人数指導（20人程度）を進める。
 具体的な進め方（ ）

理由

(4) 平成13年度から、40人学級編制のままで主要教科等での「少人数指導（20人程度の授業）」が開始されました。**1年生の学年にこの制度を適用する効果・影響について、貴方はどう思いますか。**

1. 実施してみて、大いに効果があったと思う。
2. 実施してみて、ある程度は効果があったと思う。
3. 実施してみて、むしろ弊害があったと思う。
4. 平成13年度において1年生では実施していない。

実施状況や理由

(5) 「小学1年生はばたきプラン」に関して、今後まず、貴県としてどのような改善・充実を進めればよいと思いますか。

1. まず1年生に関しては一斉に少人数学級編制に踏み切る。
2. まず「はばたきプラン」を2年生を含めた低学年に広げる。
3. その他（ ）

【進学前課程（幼稚園）と小学校との連携について】

(2) 貴方の学校（地域）では、就学前機関（幼稚園・保育所）と小学校との連携を進めるために、何らかの取り組み（試み）を行っていますか。

1. 行っていない
2. 行っている

具体的に

設問D：1年生における教員配置施策

(1) 全国的には少人数学級編制を独自に打ち出す自治体も出ています（添付資料⑩）。一般的に見て、1年生の学年ではどのような教員配置施策が望ましいと思いますか。

1. 40人学級編制を改めて、少人数学級編制（学級分割）を進める。
具体的に：a. 35人学級編制 b. 30人学級編制 c. その他（人）
2. 40人学級編制のままで、ある規模以上の学級で複数担任によるTTを進める。
具体的に：a. 35人超過学級 b. 30人超過学級 c. その他（人）
3. 教科や学習課題に応じて、学級分割とTTの双方を組み合わせて活用する。
具体的に：a. 35人超過学級 b. 30人超過学級 c. その他（人）
4. 40人学級編制のままで、主要教科等での少人数指導（20人程度）を進める。
具体的な進め方（)

理由

(2) 平成13年度から、40人学級編制のままで主要教科等での「少人数指導（20人程度の授業）」が開始されました。1年生の学年にこの制度を適用する効果・影響について、貴方はどう思いますか。

1. 実施してみて、大いに効果があったと思う。
2. 実施してみて、ある程度は効果があったと思う。
3. 実施してみて、むしろ弊害があったと思う。
4. 平成13年度において1年生では実施していない。

実施状況や理由

(3) 「小学1年生はばたきプラン」に関して、今後まず、貴校としてどのような改善・充実を進めればよいと思いますか。

1. まず1年生に関しては一斉に少人数学級編制に踏み切る。
2. まず「はばたきプラン」を2年生を含めた低学年に広げる。
3. その他（)

－調査用紙・3頁目（校長用共通）－

設問E：平成13年度「小学1年生はばたきプラン」

(1) 今回の「小学1年生はばたきプラン」による措置がなかったと仮定した状況と比較して、貴方の学校ではこの1年間を通して「小学1年生はばたきプラン」がどの程度の成果を挙げたと思いますか。

1. 非常に成果があった
2. ある程度あった
3. どちらとも言えない
4. あまり成果はなかった
5. ほとんどなかった

具体的に

（学習・生活指導や学級経営に関する面、担任・子ども・保護者にとって、など）

(3) 「小1プロブレム」（または低学年問題）への対応や「はばたきプラン」に関して、貴方は今後どのような点を改善したり、実践を進めればよいと思いますか。

具体的に

*貴校における「小学1年生はばたきプラン」関連の資料（保護者向け配付資料、実践記録、新聞記事など）がございましたら、是非ともご同封下さい。決して、学校・学級名等は公表いたしません。

年度末の極めて多忙な時期にご協力をいただき、誠に有り難うございました。

返信用封筒にて、3月末日まで（遅くとも春休み明けまで）に郵投回下されれば幸いです。

対象事例番号：

0	1	3	4	
---	---	---	---	--

－調査用紙・4頁目（「学級分割」タイプの担任用・校長用共通）－

設問E：平成13年度「小学1年生はばたきプラン」

(1) 貴方の学級に加配された非常勤講師の方についてお知らせ下さい。

a) 性別 1. 女性 2. 男性

b) 年齢（3月現在）

1. 20歳代 2. 30歳代 3. 40歳代 4. 50歳代 5. 60歳代

c) 講師経験 1. あり 2. なし

その他の特記事項

(2) 今回の「はばたきプラン」加配がなかったと仮定した状況と比較して、貴方の学級ではこの1年間を通して「はばたきプラン」がどの程度の成果を挙げたと思いますか。

1. 非常に成果があった 2. ある程度あった 3. どちらも言えない
4. あまり成果はなかった 5. ほとんどなかった

具体的に

(学習・生活指導や学級経営に関する面、担任・子ども・保護者にとって、など)

(3) 「小1プロブレム」（または低学年問題）への対応や「はばたきプラン」に関して、貴方は今後どのような点を改善したり、実践を進めればよいと思いますか。

具体的に

※貴方の学級における「小学1年生はばたきプラン」関連の資料（保護者向け配付資料、実践記録、新聞記事など）がございましたら、是非ともご同封下さい。決して、学校・学級名等は公表いたしません。

年度末の極めて多忙な時期にご協力をいただき、誠に有り難うございました。

返信用封筒にて、3月末日まで（遅くとも春休み明けまで）に御投函下さい。

対象事例番号：

0	1	3	4	
---	---	---	---	--

－調査用紙・4頁目（「補助教員」タイプの担任用）－